

# FIFA Women's World Cup Canada 2015 JFA Technical Report

FIFA女子ワールドカップ カナダ 2015  
JFAテクニカルレポート



## 目次

1. はじめに	2
2. 大会全般	3
3. 大会の特徴、トレンド	6
4. ベンチマークプレイヤー	9
5. 日本の闘い	10
6. 日本の特長と課題	15
7. アジア勢の闘い	18
8. 育成への示唆	21
9. ベスト8のチーム	25
10. ゴールキーパー	33
11. データから見たFIFA女子ワールドカップ 2015	35
12. まとめ	39
寄稿 様々な観点から見たFIFA女子ワールドカップ 2015	40
1) なでしこジャパン フィジカルコーチ 広瀬 統一	
2) 国際女子主審 山岸 佐知子、国際女子副審 手代木 直美	
3) U-19 日本女子代表監督 高倉 麻子	
4) JFA 理事、なでしこジャパン団長 上田 栄治	
5) JFA 理事、女子委員長 野田 朱美	

## 1. はじめに

女子のワールドカップは、1991年に女子の「世界選手権」として第1回大会が中国で開催された。第4回大会からは正式に「FIFA女子ワールドカップ」となり、第7回大会となる今大会は、カナダで開催された。

今大会の決勝戦は、日本対アメリカの対戦となった。図らずも4年前のドイツ大会の決勝戦と同じ対戦となり、ロンドンオリンピックの決勝戦を入れると、女子の主要な世界大会の決勝戦が3度、同じ対戦になったことになり、正に世界の女子サッカーの頂点を決するゲームとなった。

結果はアメリカが優勝をし、連覇を目標に今大会に挑んだ日本女子代表「なでしこジャパン」は、アメリカに2対5で敗れ準優勝であった。優勝したアメリカは、テクニクに優れ、個々の選手の持つ戦術は高く、スピード、パワーを兼ね備えた名実共に世界チャンピオンに相応しいチームであった。今大会、準決勝戦に進んだドイツ、イングランドの他にも近年、育成に力を入れて着実に実力を付けた国がグループステージを勝ち抜きノックアウトステージ（決勝トーナメント）に駒を進め活躍をした。開催国カナダは、3位になったイングランドと互角以上に闘った。フランスは準々決勝でPK戦の末、ドイツに敗れたが、攻守両面でテクニクに優れ、レベルが高いチームであった。ブラジルはノックアウトステージ1回戦で、オーストラリアに分析され、ブラジルの特長を消されて敗れたが、目指すサッカーの質は高く、テクニクを活かし、攻守にハードワークを惜しまない好チームであった。アジアにおいては、中国が基本のテクニクを身に付けた身体能力の高い選手をあつめ、統率のとれたディフェンスからスピードある攻撃でベスト8に入った。この他にも、ニュージーランド、スイス、オーストラリア、コロンビアなどは上位に入ったチームとも対等の闘いをみせた。

このように、世界の女子サッカーは、現在までトップリーダーとして世界の女子サッカーをリードしてきた国々を追従する国が数多く出てきている。また、技術、戦術的な面から見ても、確実に発展しており、以前に体格、体力重視の傾向が見られた女子サッカーが「テクニカルで、スピーディーに、コレクティブに。そしてタフに」闘うチームが増え、まさにサッカーの進化に男女差はなく、男子のサッカーと同一方向に進化しているといえる。

JFAでは常に進化を続ける世界のサッカーを分析し、その方向性を把握して育成年代の選手の指導に活かす必要があると考え、1998年に男子が初めてワールドカップに出場する以前から、日本代表が大会に出場する、しないに関わらず各年代の国際大会にテクニカルスタディーグループ（TSG）を派遣してきた。現在ではワールドカップはもとより、各年代の国際大会、アジア予選、国内大会にもTSGを派遣し、各大会を分析し成果と課題を把握し、育成年代の選手の指導法や考え方を導き出している。その内容を日本中の指導者の方と共有し、日々の指導に活用していただき、「世界と闘える選手の育成」をめざしていきたいと考えている。

今大会も一戦一戦、苦しいゲームを強いられながらも、ひた向きに粘り強く闘った「なでしこジャパン」は、4年前と同じように日本の国民に大きな希望と感動を与え、また、多くの国民が心から応援をしてくれるチームであった。今後も日本の誇りとなる「世界のなでしこ」であり続けるために、このレポートを日本の多くの指導者の方々にご活用いただければ幸いである。

## 2. 大会全般

### 【大会概要】

開催国：カナダ

開催期間：6月6日から7月5日

参加チーム数：24チーム（大陸別参加数＋開催国）

大会成績：優勝 アメリカ

準優勝 日本

3位 イングランド

4位 ドイツ

フェアプレー賞：フランス

個人賞：

ゴールデンボール（MVP）	Carli LLOYD（アメリカ）
シルバーボール	Amandine Henry（フランス）
ブロンズボール	宮間 あや（日本）
ゴールデンブーツ（最多得点）	Celia SASIC（ドイツ）
シルバーブーツ	Carli LLOYD（アメリカ）
ブロンズブーツ	Anja MITTAG（ドイツ）
ゴールデングローブ（最優秀GK）	Hope SOLO（アメリカ）
最優秀ヤングプレーヤー	Kadeisha BUCHANAN（カナダ）

### 【スポーツを観て楽しむカナダでの大会】

第7回FIFA女子ワールドカップはカナダでの大会となった。昨年夏にプレ大会として、U-20女子ワールドカップを実施し、万全の準備をして開催された。試合会場の6都市の中で、一番東の会場のモンクトンから西に向かってモントリオール、オタワ、ウィニペグ、エドモントン、一番に西に位置するバンクーバーまで、最大4時間の時差があり、すべての会場の移動が飛行機での移動となるカナダ全土にわたる会場で行われた。

カナダではアイスホッケー、ベースボール、ラグビー、バスケットボールなど多くのスポーツが盛んで、女子のスポーツの中では、サッカーは人気のあるスポーツの一つである。カナダにはスポーツを見て楽しむ文化が定着していて、テレビではスポーツの放送が常に流れていた。また、今大会では、高齢の方から子供までが家族でゲームを観戦し、大会を楽しむ光景がどこの会場でもみられ、中でも少女や若い女性の観戦者が多かったことは、カナダの女子サッカーに対する関心の高さが感じられた。

### 【世界の女子サッカーの進化 -世界のサッカーの目指す方向に男女差はない-】

今大会を含め、近年の世界の女子サッカーの発展は目覚ましく、攻守の一体化が進み、「テクニカルに、スピーディーに、コレクティブに、そして、タフに」になっている。スピード、パワーには、男女としての差はあるものの技術、戦術的發展傾向は正に、男子と同じ方向に進化していると言える。

近年、世界の女子サッカーを牽引してきたトップリーダーであるアメリカ、日本、ドイツは今大会でも上位

に入賞しその実力を示した。そして、これらの国に追随し、ノックアウトステージ（決勝トーナメント）に駒を進めたフランス、ブラジル、スイス、カナダ、オーストラリア、中国などは目指すサッカーの質が高く、上位国と対等な闘いを見せた。特に準々決勝でドイツに PK 戦の末に敗れたフランスはテクニックに優れ、攻守両面でのプレーの質が高く、今大会においては特筆に値するチームであった。この他にも、カメルーン、コロンビアやグループステージを突破できなかったニュージーランド、スペインなど。ゲームによっては上位に進出したチームに互角以上の闘いをみせたチームもあり、これらのチームが未だ完成はされてはいないものの、志向しているサッカーは世界基準のサッカーであった。テクニックを重視し、攻守にハードワークするサッカーは、どの国も志向しながら、その上に各国の特長や個性を加味したサッカーが展開されていた。

このように、世界の女子サッカーは確実に発展をしており、その方向は、「テクニカルに、スピーディーに、コレクティブに、そしてタフに」なっているとと言える。

#### 【参加チームが増加しながらも拮抗したゲームを展開（16 チームから 24 チームへ）】

前回大会は参加チームが 16 チームであったが、今大会から参加チーム数を各大陸の予選を勝ち抜いた 23 チームに開催国カナダを加えた合計 24 チームへ増やし、総ゲーム数が 36 ゲームから 52 ゲームへと試合数も増えた。

グループステージを 6 グループの 4 チームの総当たりで戦い、上位 2 チームが自動的にノックアウトステージ（決勝トーナメント）に進み、3 位の中から勝ち点の高い 4 チームと合わせ合計 16 チームがノックアウト方式で優勝を争う形式で行われた。3 位のチーム 6 チームの中から 4 チームにも決勝トーナメント進出の可能性のあることから、グループステージの初戦から第 3 戦まで、1 戦 1 戦、緊迫したゲームが展開された。

今大会から参加チームが 8 チーム増えたことで、中には大差（4 点差以上）の付くゲームあったが、グループステージの 36 ゲームにおいて、引き分けが 10 ゲーム、1 点差 15 ゲーム、2 点差 5 ゲームと計 30 ゲームが僅差のゲームであった。このことから、世界の女子のサッカーは確実にレベルが拮抗してきたといえる。

#### 【人工芝のピッチでの大会】

今大会は 6 会場、すべて人工芝のピッチで行われた。会場ごとに人工芝の質やチップの量によってバウンドが変化したり、パススピードに差がでるとの選手からの感想があった。ゲームの開始前に水を撒いたが日差しが強い会場ではすぐに乾いてしまい、ゲーム中にパスのスピードが変化するという選手からの指摘もあった。また、天候やゲームの開始時間によってはピッチが太陽の照り返しによって高温になり、ハーフタイムにはスパイクを脱ぎ、冷水で足を冷やす選手がいた。この状態がさらに進み、選手の足の裏が火傷等のけがにつながってしまうようなことになると、大会としては問題があることになる。今後、けがの種類やけがの発生率を含め、大会運営サイドの検証、検討が必要である。また、ピッチの質、スパイクのスタッドの形状等もより適したものへとさらなる改良も必要であると考えられる。

#### 【自動ゴール判定システムの導入】

今大会から、初めて自動ゴール判定システムが導入されて、ゴールの判定がより正確にジャッジされるようになった。日本の準決勝戦、対イングランド戦の決勝点となったイングランドのオウンゴールの判定も正確な上に説得力を持った形で示されたことで、大会のスムーズな運営につながったと考えられる。

### 【名実共にチャンピオン「アメリカ」】

今大会の優勝チームのアメリカは、選手個々の持つテクニックと身体能力の高さベースにして、チーム全体で攻守にハードワークし、チームとしての統一感を持って闘える完成度の高いチームであった。攻撃においては、前線にスピードと運動量のある⑬Alex MORGAN とテクニックと得点能力に優れる今大会の最優秀選手⑩Carli LLOYD を置き、サイドにドリブルで相手の守備組織を崩すことができる⑮Megan RAPINOE、⑰Tobin HEATH がサイドからの攻撃の起点となった。また、SB の⑪Alex KRIEGER、⑫Meghan KLINGENBERG はスピードと運動量があり、オーバーラップからチャンスを作った。守備においてはボランチに相手の攻撃の起点を作らせない積極的な守備をした⑫Lauren HOLIDAY と常にバランスを崩さないポジション取りで中盤の安定した守備を支えた⑭Morgan BRIAN が相手の攻撃の起点を抑えてチームに貢献した。CB の⑲Julie JOHNSTON と④Becky SAUERBRUNN はヘディングが強く、守備能力が高い選手でチームの守備の要として機能した。大会最優秀ゴールキーパー賞（ゴードングローブ賞）を受賞したGK①Hope SOLO はゴールキーパーとしての守備能力の高さはもとより、攻撃に関わるプレーの質も高く、絶対的な存在感でアメリカのゴールを守り、優勝に大きく貢献した。また、途中出場が多かった⑳Abby WANBACH は、経験値の高さを活かして重要な局面で出場をし、チームに勇気と活力を与え、チームの中での存在感を示した。

アメリカは個々の選手が高いテクニックを持ち、それぞれの選手が自らの特長を活かしながらチームのために惜しむことなくハードワークすることができるチームであった。

### 3. 大会の特徴、トレンド

#### 「よりテクニカルに、スピーディーに、コレクティブに、そしてタフに」

今大会は1999年以来のアメリカの3回目(最多回数)の優勝で幕を閉じた。今大会で優勝したアメリカが見せたサッカーには、世界的女子サッカーの進化やトレンドが今までの大会以上に大きな変化が見られ「よりテクニカルに、スピーディーに、コレクティブに、そしてタフに」と今後の世界的女子サッカーの進むべき道が示された大会となった。前回大会で日本が優勝し、女子サッカーの世界に新たなスタイルを築き「なでしこらしいサッカー」を示した。そして、この4年間、各国が研究を重ね今までのスタイルにプラスされる形で攻守一体にコレクティブなサッカーを志向するチームが増えた。また、各国がレベルアップし、質が高まっていく中で、タフさも求められる大会となった。もともとのスピードやフィジカルの強さ、勝負に対してのタフさ、ここぞという時にスイッチを入れて、勝負を仕掛けるメンタリティー、さらにテクニカルにコレクティブなサッカーを展開したアメリカは今大会の進化を象徴したチームであった。

#### 【テクニカルに】

基本的な技術が身につけていないと、現代サッカーの進化の中で対応することが難しくなっている。特に守備組織がより強固になり、攻守の切り替えが速くなっている中で、オフの状況での準備や、意図的にプレーをする技術や判断をすることが求められた。また、状況に応じたキックの質や種類、意図的にボールを運ぶことができる選手や、相手の状況に応じて判断を変え、局面を打開する選手など、テクニックの質が高い選手が見られた。ゴールへ向かう意識やゴールに奪うための推進力や突破のテクニックを持ち合わせた選手が上位チームには存在し、相手チームに脅威を与えていた。その中で、「日本」「フランス」はテクニックを活かし、相手の状況を把握した中で、意図的なプレーや状況に応じたテクニックを発揮していた。「アメリカ」「ドイツ」には、個のテクニックを活かし、ゴールを奪うことができる選手が存在していた。

#### 【スピーディーに】

攻守の切り替えが速くなっている現代サッカーにおいて、今大会では、よりスピーディーな攻守の切り替えが要求された大会となった。特に、攻撃から守備への切り替えでは、より速く守備組織を整えることが求められた。逆に守備から攻撃に切り替える際に、相手の守備組織が整う前に仕掛けるスピードや相手の隙を突く判断スピードが必要であり、単純にスピードを上げるというよりも、いかにして良い準備をし、相手の状況を把握した中で、スピーディーに判断することができるかが求められた。その中で「アメリカ」「フランス」は、攻守の切り替えが速く、有効な攻撃と守備を行った。

#### 【コレクティブに】

攻守の一体化が進み、組織的にサッカーを展開していくチームが増え、その総合力が上位進出につながるキーファクターとなり、その中で完成度や質の高いチームが上位に進出した大会となった。参加チームが増え、各国の特徴を活かし様々なスタイルのチームを見ることができ、世界的女子サッカーの方向は、コレクティブな要素がより強くなっていると感じた。守備においても、攻守の切り替えを速くし、チーム全体で守備組織を作り、ボールを奪うための準備を構築していた。特に攻撃時にバランスよく距離感を保ちながら、仕掛けることで、ボールを失った瞬間に素早く守備組織を整えることができ、再びボールを奪い返すことができていた。コ

レクティブに攻撃を仕掛けると共に、守備への準備も同時に行えて、攻守が一体となったサッカーを展開することができていた。また、攻撃の選手の守備能力の重要性が高まっていた。前線での守備意識、ボールを奪うことや後方の選手がボールを奪うチャンスを作り出すためのプレッシング。コースの限定、プレスの距離など、守備における役割も増え、コレクティブに守備を構築するために重要な役割となっていた。そして、全体の関わりの距離やバランスが悪く、相手に有効なスペースを与えることで、簡単に崩されてしまう場面が見られた。今後、世界で戦っていく中で、よりコレクティブに、攻守において関わりを持ちながら、その質を高めていくことが重要となる大会となった。その中で「フランス」は常に関わりを持ちながら、攻守において一体化し、個の能力を生かしたコレクティブなサッカーを展開していた。

#### 【タフに（ハードワーク）】

コレクティブなサッカーを展開する中で、関わりを持ち数的優位を作り出すこと、スプリントする回数や常にハードワークをし続け、それを90分戦えきるタフさを持ち合わせているかがより求められた大会となった。また、チーム数が増えて、グループステージにおいても消化試合となる試合が少なくなり、常に真剣勝負が続いた。ノックアウトステージにおいても、ラウンド16からのスタートとなり、前回大会よりも1試合増え、大会を戦いきるタフさが求められた。それぞれのポジションにおいて、ハードワークを求められるが、特に前線の選手やSBの選手の攻守における運動量。中盤の選手の関わりを持ちながら起点として展開していくための運動量など、90分を戦いきるタフさが求められた大会となった。特に「中国」においては、全員が試合終了の笛が鳴るまで、ハードワークし能力の高いアスリートの集団が、タフさを持ち合わせてサッカーを展開していた。

#### 【ポゼッションサッカーを志向】

コレクティブなサッカーを展開していく中で、ポゼッションは非常に重要な要素となっていた。全体的にGKから、DFラインへの配球が多く見られ、ビルドアップしていくチームが以前に比べて多く見られた点が大きな進化であると感じた。以前であればGKは、ロングキックを多用していたが、今回の大会では、GKがDFの選手に配球する意識、ボールを受ける選手も素早く準備をし、攻撃の組み立てへと入っていた。その中で、ボールを意図的に動かすといった点では、各チームの差が大きく見られたものとなった。GKからDFラインや中盤までは、ボールを動かすことができるが、アタッキングサードでの組み立てという部分では意図的なプレーが少なかった。相手の状況というよりは、自分たちのパターンで突破を仕掛けるという形になっていた。そして、攻守に意図をもって取り組んでいるチームは、中盤にテクニックがあり、意図的に相手の状況を観ながら、変化をさせて、パスを配球する選手が存在していた。また、周りの選手が関わりを多くし、パスコースや選択肢を増やし、個のテクニックやグループでの関わりで、有効なポゼッションを作り出していた。その中で、いかにしてボールを動かし相手と駆け引きをしながらゴールを奪う為の縦パスを通すことができるかが、今後求められるものとなっていた。ただ横パスを回すだけやパターンで突破を図るのではなく、意図的に相手の守備陣形を崩し隙をつくパスを出せることやポゼッションの質が求められる傾向にあると考えられる。「日本」は、前回大会でも見せたようにボールをつなぎ組み立てていくスタイルや、相手と駆け引きしながらポゼッションしていく部分では、テクニックを生かし関わりを持ちながらコレクティブにサッカーを展開していた。



### 【セットプレーの重要性】

セットプレーにおいても、今大会で様々な形で進化が見られた。前回大会では、宮間の精度の高いキックからセットプレーにより日本が優位にゲームを進め、また試合を決定づけるプレーや同点に追いつくシーンが見られ、セットプレーが重要視される大会となった。そして、4年が経ち、今大会では各国もセットプレーに色々な変化をつけ、工夫の見られた大会となった。ゴール前への入り方、ショートコーナーやトリックプレーを有効に使ったシーンから見られるように、セットプレーにおいても意図的な攻撃をするチームが増えた。印象的なシーンとして決勝戦でアメリカが日本に対して変化をつけたセットプレーを行い、得点をあげたシーンがあげられる。また、キックの質やスピード、ヘディングの強い選手への狙いなど、キッカーの質も高まっている大会となった。

## 4. ベンチマークプレイヤー

### 【GK】

- ① Hope SOLO (アメリカ)
  - ・シュートストップの反応スピードや守備範囲の広さが特徴。
- ① Nadine ANGERE (ドイツ)
  - ・ゴール前での存在感や雰囲気、ボールを奪うことへの意識が高い。

### 【DF】

- ⑱ Julie JOHNSTON (アメリカ) CB
  - ・安定した守備で、ボールを奪う意識が高く、攻撃参加も積極的。
- ② Wendie RENARD (フランス) CB
  - ・大型の選手だが、テクニックを持ち合わせ、ボールを奪う意識が非常に高い選手。チャンスの際は攻撃参加。
- ⑱ 有吉 佐織 (日本) SB
  - ・運動量が豊富で、攻守において関わりを持ち、攻撃の起点となりチャンスを作り出していた。
- ② FABIANA (ブラジル) SB
  - ・サイドでの1vs1の突破や攻撃に関わる意識が非常に高く、運動量が豊富な選手。

### 【MF】

- ⑫ Lauren HOLIDAY (アメリカ)
  - ・攻守において関わりを持ちながら、攻撃の起点となっていた。
- ⑧ 宮間 あや (日本)
  - ・テクニックを生かし、サイドで起点となりチャンスを作り出していた。ゴールへつながるラストパスや精度の高いキックを見せていた。
- ⑥ Amandine HENRY (フランス)
  - ・常に攻守において関わりを持ちながら、相手の状況を観て、判断してパスを配球し、変化を作り出すことができる選手。
- ⑳ FORMIGA (ブラジル)
  - ・豊富な運動量とタイミングよく、関わりを持ち、攻守において起点となっていた。

### 【FW】

- ⑬ Alex MORGAN (アメリカ)
  - ・スピードを生かした突破やゴールへ向かう意識は高く、個で打開できる選手。
- ⑩ Carli LLOYD (アメリカ)
  - ・前線で起点となり、テクニックを生かし、ゴールを決めることができる選手。
- ⑬ Celia SASIC (ドイツ)
  - ・ゴールへ向かう意識やゴールを奪う能力が高い選手。

## 5. 日本の闘い

### グループステージ

【スイス戦 1-0 ○ 6月8日(月) 19:00 バンクーバー】

連覇を狙う日本のグループリーグ初戦は、ヨーロッパ予選を勝ち上がったスイスとの対戦となった。前半スイスに対して日本は、GK②山根から確実にボールをつなぎ、CBの③岩清水④熊谷、SB⑯有吉、⑬宇津木の4バックでボールを回しながら、テクニックを活かし、ボランチの⑩澤、⑥坂口を経由し、⑰大儀見にボールが入ると⑦安藤、SH⑪大野、⑧宮間が関わり、流動的な攻撃でスイスの守備を崩しゴールを目指した。また、スイスの中央の突破を狙うことで、両サイドにできたスペースに⑯有吉、⑬宇津木がタイミングよくオーバーラップし、クロスからチャンスを作った。守備においては4バックの安定したラインのコントロールから、中盤をコンパクトに保ち、チャレンジとカバーを繰り返しながら組織的に守った。また、ボールを奪えるチャンスがあると前線からプレッシャーを強めボールを奪いに行く積極的な守備を行った。前半27分、日本はスイスのDFラインの裏へ、タイミングよく抜け出した⑦安藤がGKに倒されPKを得ると⑧宮間が確実に決めて先制をした。⑦安藤はこのプレーでスイスのGKと交錯した際に負傷し、⑮菅澤と交代した。

後半に入り、スイスはDFラインを上げて、前線から中盤にかけてチーム全体でプレッシャーをかけて積極的にボールを奪い、奪ったボールを2トップの⑩BACHAMANN、⑪DICKENMANNのスピードを活かしたシンプルな突破から、チャンスを作った。1点を追うスイスは、その後もチームとして前線からの守備を徹底した。その結果、日本はスイスのプレッシャーに徐々に中盤でボールを失うことが多くなり、スピードあるドリブル突破とクロスからの攻撃に守勢に回り、苦しい闘いを強いられた。後半残り15分は、攻め込まれる時間が増え、クリアボールも拾われることが多くなったが、②GK山根と③岩清水、④熊谷のCBを中心とした日本のDFラインはスイスのクロスへの攻撃にも正確なポジショニングからヘディングで競り合い、堅実に対応した。また、チーム全体で組織的に守り、最後まで集中力を切らさない統率のとれた守備で1点を守りきり、苦しい初戦を勝利した。

【カメルーン戦 2-1 ○ 6月12日(金) 19:00 バンクーバー】

日本のグループリーグ第2戦は前線にスピード豊かな選手を揃えるカメルーンとの対戦となった。日本は前半の立ち上がりからテクニックを活かし、GK⑱海堀を含めて4バックで確実にボールをつなぎながら、2トップの⑰大儀見、⑮菅澤のサイドのスペースへ流れる動きにSH⑨川澄、⑤鮫島が関わりながらサイドを崩し、クロスからチャンスを作った。ボール保持する時間が長く優勢に試合を進める中、前半6分、右サイドを崩して抜け出した⑨川澄の低くて速いクロスに⑰大儀見が飛び込み、抜けたボールを⑤鮫島が確実に決めて先制した。その後も、安定したボールポゼッションから、攻勢を強める日本は、ボールを奪われた後の攻守の切り替えの意識がチーム全体に徹底されており、中盤で奪われた瞬間にボールにプレッシャーをかけて、カメルーンの狙いとするタテへのスピードを活かした攻撃の形を作らず、優位にゲームを進めた。前半17分には、左サイドで攻撃の基点となる⑧宮間からの右足の正確なクロスに⑮菅澤がヘディングで合わせて追加点を奪った。守備においては③岩清水④熊谷のCBを中心に4バックのDFラインの統率がとれており、ボール状況に応じて、DFラインをコントロールし、中盤をコンパクトにしなが、ボランチの⑬宇津木、⑥坂口が積極的にボールヘプレスをかけて、カメルーンのパスの出どころを抑えた。また、FWの下がりながらの守備やカメルーンの選手を囲い込みながらボールを奪いに行く積極的な守備で、主導権を握りゲームを進めた。

後半に入り、日本はボールを確実に回しながら、カメルーンの時折見せるスピードあるシンプルな攻撃に対応しながらゲームを進めたが、後半の20分過ぎから、カメルーンがチーム全体でプレッシャーを強め、ボールを積極的に奪いに来ると中盤でのパスにミスがでてボールを奪われることが多くなった。さらにカメルーンは、奪ったボールを⑰Gaelle ENGANAMOUIT、⑦Gabrielle ONGUENEのスピードを活かしたシンプルなDFラインの裏へ走り込む攻撃にピンチを招くことが多くなり、ゲーム終了間際後半45分にカメルーンのボールを奪ってからのスピードある攻撃に失点をした。その後も勢いに乗り、スピードあるシンプルでパワフルな攻撃に日本は守勢に回り、アディショナルタイムにもカメルーンに決定機を作られたが、チーム全員で粘り強くゴールを守り、勝負強くグループステージ2勝目をあげた。

【エクアドル戦 1-0 ○ 6月16日(火) 16:00 エドモントン】

グループステージ第3戦。エクアドルとの対戦に日本は第1戦、第2戦とメンバーを大きく入れ替えてゲームに臨んだ。自陣に引いて守備を厚くして戦うエクアドルに対して、日本は前半からGK①福元も含めてボールを確実に回しながら、中盤の⑩澤、⑭田中のボランチを使い、前線にいる⑰大儀見、⑮菅澤にボールを送り、そのボールに⑪大野⑧宮間が関わり、エクアドルの守備組織の崩しを狙った。

前半の立ち上がり 5 分に、⑧宮間の左サイドからの正確で速いクロスに⑮菅澤が飛び込み、抜けたボールを⑰大儀見が蹴り込み先制し、ゲームの流れを引き寄せた。その後も日本はボールを保持する時間が長く、終始攻勢に試合を進めたが、中盤に人数を多く配置しチーム全体で粘り強く守るエクアドルの守備を完全に崩すことができず、前半を終了した。後半に入ってから圧倒的にボールを保持し、攻勢を保ちながらエクアドルのゴールに迫るが、前線での意図的な崩しが少なく、また、ラストパスやコントロール、クロスの精度に欠け、追加点を奪うことができなかつた。後半 35 分に⑯岩渕を投入すると DF ラインの裏への飛び出しや守備ブロック内で前を向き仕掛けるプレーが見られチャンスを作るものの、追加点を奪うには至らなかつた。

守備においては、日本は前線や中盤で、チャンスがあれば積極的にプレッシャーをかけて高い位置でボールを奪い、シンプルにゴールを目指した。また、ボールを保持する時間が長く攻勢にゲームを進める中でも、相手のカウンター攻撃に対してのリスクマネジメントはチームに浸透されていて、時折見せるエクアドルのスピードある攻撃にもボールを奪われた瞬間に積極的にプレッシャーをかけてスピードを止め、チーム全体で守備への切り替えを徹底して、エクアドルの攻撃の芽を摘んだ。日本は終始優勢にゲームを進めたが最終的に追加点を奪うことができず、1 対 0 でゲームを終え、グループリーグ 3 勝で C グループ 1 位となり、ノックアウトステージに進んだ。

## ノックアウトステージ

### ラウンド 16

【オランダ戦 2-1 ○ 6 月 23 日(火) 19:00 バンクーバー】

攻撃においては、日本は GK⑱海堀を含め最終ラインからボールを確実につなぎ、ボランチの⑲宇津木、⑥阪口を經由して前線の⑰大儀見のポストプレー、⑪大野のスペースへ流れてボールを受けるプレーを攻撃の起点として SH⑨川澄、⑧宮間が関わり中央からゴールを目指した。また、中央を攻めることでサイドにできたスペースに SB⑲有吉、⑤鮫島が、タイミングよくオーバーラップしてクロスからゴールを狙った。SB⑤鮫島、⑲有吉、SH⑧宮間、⑨川澄のサイドの数的優位を活かした突破からの攻撃はゲームの中で有効に機能していた。前半 10 分、左サイドを崩して抜け出した⑧宮間のクロスをも⑰大儀見がヘディングシュートし、このボールがバーに当たり跳ね返りを相手 DF がクリアミスをし、そのボールをペナルティエリアの中まで詰めていた⑲有吉が右足で蹴り込み先取点を奪った。

守備においては GK⑱海堀、CB の④熊谷、③岩清水を中心に⑤鮫島、⑲有吉の 4 バックは正確にラインコントロールをしながら、中盤をコンパクトに保ち、前線の⑰大儀見、⑪大野が相手のパスコースを限定し、ファースト DF が決まると他の選手が連動して、積極的にボールを奪いに行く守備を行った。チーム全体の攻守の切り替えの意識は高く、ボールを奪われた瞬間に相手にプレッシャーをかけて、オランダに攻撃の起点を作らせない守備を徹底した。また、GK と連携して最後まで粘り強くゴールを守る守備は集中を切らすことなく機能した。

後半 33 分には、左サイドからペナルティエリア深くに攻め込み、低いクロスを⑯岩渕がオーバーをし、このプレーでオランダ DF がつられて、⑥阪口が左足でカーブをかけたシュートを落ち着いて決めて 2 対 0 とリードした。後半残り時間がわずかになり、シンプルなクロスを多用しゴールを狙うオランダの攻撃に守勢に戻る場面も見られ、アディショナルタイムに失点はしたが、最後は集中して守り切り、準々決勝に進出した。

## 準々決勝

【オーストラリア戦 1-0 ○ 6月27日(土) 14:00 エドモントン】

準決勝進出をかけたオーストラリアとの対戦は、日差しが強く真夏を思わせる天候の中の闘いとなった。日本は GK⑩海堀から DF ラインにボールをつなぎ、CB③岩清水、④熊谷、SB⑯有吉、⑤鮫島で構成する4バックで確実にボールを組み立て、前線の2トップの⑰大儀見がポストとなりボールを受け、⑪大野がスペースへ流れ、攻撃の起点を作ると、SH⑨川澄⑧宮間がこれに関わり、空いたサイドのスペースに SB⑤鮫島⑯有吉がオーバーラップしサイドを崩し、クロスからチャンスを作った。

オーストラリアは暑さの為か、運動量が少なく確実に攻撃を組み立てようとするものの、単純なミスが多く意図的な攻撃ができず、個人のドリブルでの仕掛けや中盤からの単調なクロスの攻撃に終始した。後半に入り15分を過ぎて、オーストラリアは更に運動量が落ち、日本の中盤からのプレッシャーにボールを失うことが多くなり効果的な攻撃はできなかった。対する日本は後半にも運動量が落ちることなく、テクニックを活かしゲームの主導権を握り攻撃を仕かけた。特に⑤鮫島の再三にわたる長い距離を駆け上がるオーバーラップは日本の攻撃の大きな武器となって機能した。

守備においては、日本は中盤に守備ブロックを作りスペースを埋め、ボールが入ると⑬宇津木⑥阪口を中心にプレスをかけて、それに連動をしてチーム全体でボールを奪いに行く守備を行い、相手に意図的な攻撃の形を作らせなかった。後半、相手の運動量が急速に落ちる中、中盤で積極的にボールを奪い、奪ったボールを後半途中から出場した⑯岩渕⑰大儀見⑨川澄を使い速い攻撃につなげた。残り時間が僅かになった後半42分に日本は GK からのゴール前にこぼれたボールに⑯岩渕が反応して倒れながら決勝ゴールを挙げ、準決勝戦へ進んだ。

## 準決勝

【イングランド戦 2-1 ○ 7月1日(水) 17:00 エドモントン】

決勝進出まであと1勝と迫った日本の準決勝の相手は、準々決勝で開催国カナダを下し、勝負強く勝ち上がったイングランドとの対戦となった。日本は GK⑩海堀から CB③岩清水、④熊谷、SB⑯有吉、⑤鮫島で構成する4バックでボールを回し攻撃を組み立て、前線の2トップの⑰大儀見のポストプレーと⑪大野のサイドのスペースへ流れる動きで攻撃の起点を作り、そこに右サイド⑨川澄左サイド⑧宮間が流動的に関わりイングランドの守備の崩しを狙った。また、両サイドのスペースに運動量が豊かな SB⑤鮫島⑯有吉がタイミングよくオーバーラップしサイドを突破して、クロスからイングランドのゴールに迫った。

イングランドは中盤でボールを奪うと前線にいる⑱Jodie TAYLOR、⑳Jill SCOTT、㉑Toni DUGGAN の前方のスペースへシンプルにボールを送り、個々のもつスピードとパワーで突破を狙うが、日本の正確なポジショニングと組織的な守備に決定機を作ることができなかった。前半32分、日本はイングランドの守備ラインが浅くなった裏のスペースへ⑯有吉がタイミングよく走り込み、イングランドの DF の後方からのファールにより PK を得て、これを⑧宮間が冷静に決めて先制した。その後、1点を追うイングランドは日本の DF ラインの背後にシンプルな縦パスを出して攻め込み、GK とロングスローなどセットプレーからの空中戦で優勢に転じ、前半40分、GK からの混戦から PK を得て同点にし、前半を終了した。

後半に入り、イングランドはチームとして前線からプレッシャーをかけ、球際の強い守備から、日本のボールを奪うとシンプルなクロスとゴール前へのロングフィードで高さを活かした攻撃をしかけチャンスを作った。日本の守備ラインは高さに勝るイングランドの選手にも負けることなく競り合い、押し込まれながらも相

手の攻撃をしのいだ。後半残り 15 分を切るとイングランドは更に中盤でのプレッシャーを強めて、前向きでボールを奪いシンプルにゴール前にクロスを蹴り込み攻勢を強めた。日本は後半 25 分⑪大野に代えて⑩岩淵を入れて、テクニックとスピードの変化を活かしたドリブル突破からフィニッシュに繋げたが、ゴールを奪うには至らなかった。さらに日本は中盤からの相手の強いプレッシャーにボールを奪われることが多くなり、苦しい時間が続いたが、GK⑩海堀の冷静な判断と③岩清水③熊谷を中心にした DF ラインとの連携から、イングランドの高さとパワーのある攻撃を凌いだ。後半、アディショナルタイムに入ってから、イングランドのパワフルな攻撃を凌ぎ堅実な守備に徹しながら闘った。アディショナルタイムも残り僅かになった時に、日本は中盤で奪ったボールを⑨川澄が⑪大儀見にアーリークロスを送り、このボールがイングランドの DF の選手の足に当りオウンゴールとなり勝ち越しのゴールをあげた。結局このオウンゴールが決勝点となり、日本は決勝に進出を果たした。チーム全体で集中力を切らすことなく守備に徹底しながら、相手の攻撃を冷静に凌いだ守備力とゲームの中での対応力が勝利の大きな要因であった。

## 決勝

【アメリカ戦 2-5 ● 7月5日(日) 16:00 バンクーバー】

決勝戦は、前回のドイツ大会の決勝戦と同じ対戦となり、ロンドンオリンピックを間に挟むと女子の主要国際大会の決勝戦が3回連続で同じカードで行われることになった。

アメリカは前半の立ち上がりから、縦へのスピードある攻撃で日本陣内に攻め込み、前半 2 分に CK をとると⑮Megan PAPINOE が低くて速いボールを蹴り込み、⑩Carlie LLOYD が、そのボールにトップスピードで走り込み左足のアウトで合わせて先制した。その後もアメリカはテクニックを活かし、ボールを支配しながらスピードのある縦への突破から日本を圧倒した。前半 5 分も日本のファールから得た右サイドでの FK を⑫Lauren HOLIDAY が低くてスピードのあるボールをニアサイドに蹴り、再び⑩Carlie LLOYD が 2 点目を挙げた。さらにアメリカはチーム全員が高い守備意識を持ち前線から攻守の切り替えを速くして、日本にパスをつながせず、攻撃のリズムを作らせなかった。その後もアメリカはテクニックを活かし、ボールをポゼッションし⑬Alex MORGAN のサイドに流れる動きに他の選手が連動して日本のゴールに迫り、前半 14 分にクロスに対するクリアミス⑫Lauren HOLIDAY がボレーで決めて 3 対 0 となった。さらにアメリカは前半 16 分に中盤で奪ったボールを⑩Carlie LLOYD が日本の GK が前に出ていることを見て、ハーフウェイライン付近からロングシュートを打ち、これが決まり 4 対 0 として完全にゲームの主導権を握った。前半 33 分、日本は⑩澤を中盤に入れて、立て直しを図り、前半 27 分には右サイドの⑨川澄からのクロス⑪大儀見がゴール前でうまく身体を使い、ファーストタッチで DF をかわし、落ち着いてシュートを決めて、1 対 4 とした。

後半には入ってからテクニック、スピード、パワーを活かした攻撃と、速くて強い中盤でのプレッシャーからアメリカが主導権を握り闘った。日本は苦しい闘いを強いられながらも、粘り強い守備で対抗し、後半 7 分に中盤で得た FK を⑧宮間がゴール前にロングボールを送った。このボールに⑩澤が飛び込み相手 DF とヘディングで競り合い、DF の頭に当たったボールがオウンゴールとなって 2 対 4 とした。しかし、その 2 分後に再度、CK からの折り返しを⑰Tobin HEATH に決められ 2 対 5 とリードを広げられた。その後、日本は⑪大野に変えて⑩岩淵を入れ、前線を 3 トップにしてアメリカのゴールをめざしたが、得点をあげるには至らず 2 対 5 で敗れた。

アメリカは、個々のもつ身体能力の高さに加えテクニックに優れ、攻撃の主導権を持ち続け優位に闘った。また、守備においてもチーム全体の守備意識が高く、攻守の切り替えを速くして組織的にボールを奪う守備を

行い、4年前に日本に敗れた悔しさを出し尽くすような勢いのある闘いを見せて、日本に攻撃のリズムを作らせなかった。各ポジションに能力の高い選手を配し、攻守に全員がハードワークして、常にゲームの主導権を握り闘ったアメリカは、世界チャンピオンに相応しいチームであった。

## 6. 日本の特長と課題

### 【特長】

#### 大会全体を見通した統一感をもった闘い

日本が今大会で準優勝という結果を残すことができた要因の一つに、グループステージの初戦からノックアウトステージ（決勝トーナメント）、そして決勝戦までの勝ち上がりを見据えて周到な準備をして大会を闘ったことがあげられる。チームとしての準備は元より、アメリカ、ドイツ、フランスなど今大会の出場国の中でもトップレベルの実力を持つ国と決勝戦まで当たらないための勝ち上がりを考えて大会を闘い、ねらい通りに勝ち進んだことが準優勝をした一つの要因であると考えられる。また、1か月に及ぶ優勝までの長い闘いを考えて日本はグループステージで登録選手全員に出場の機会を与えW杯の実戦の場を経験させた。その結果チーム全員で大会を闘い抜く準備が整え、大会を闘うことができたことも準優勝につながる要因になったと考えられる。

また、日本はグループステージから準決勝戦まで全てのゲームで先制し、また全てのゲームで1点差の接戦を勝ち抜き、苦しいゲームを強いられながらも着実に決勝戦まで勝ち上がった。1点を追う相手チームにゲームの終盤で押し込まれ守勢に回わることもあったが、チーム全員が集中力のある統一感をもった闘い方で相手の攻撃を凌いで決勝戦まで勝ち進んだ。前回大会での優勝の経験やロンドンオリンピックでの準優勝の経験から、苦しいゲーム展開になっても自信を持ち粘り強く闘い続けることができたものと考えられる。選手、スタッフ共に、これまで「なでしこジャパン」が積み上げてきた経験値の高さは、今大会でも決勝戦まで勝ち進むことができた要因の一つにあげられる。

#### For the Team の精神

チームとしての「まとまり」は、「なでしこジャパン」の大きな力であり、日本人のもつ特長の一つである。1か月にも及ぶ大会の中でケガや好不調の波によりゲームの出場機会に差がでるなど、選手としての複雑な心理状況が絡み合う中でも選手自身が自分の責任を認識し「For the Team の精神」をもってチームのために徹した行動がとれることは、日本の素晴らしい特長であると言える。

けがの治療ために日本に帰国した安藤が手術を終えたとは言え、本来療養に専念すべきところを再度カナダに渡りチームに合流したことは、チームにとって大きな結束力につながったことは間違いない。また、チームに合流した安藤を背負ってピッチに入る山根の姿やピッチで闘う選手をベンチから見守る選手の言動には、「なでしこジャパン」がチーム一丸となって闘っていたことが見て取れた。この点はチーム関係者からも大会終了後に報告されており、日本人のもつ優れたメンタリティーの一つであると同時に日本が準優勝を勝ち取った要因の一つであると考えられる。

#### GKを含めたディフェンスラインからの安定した組み立て

今大会で日本は GK から DF ライン 4 人とボランチを使い数的優位を作り、確実にボールをつなぎながら攻撃を組み立てることでできた。常に攻撃の優先順位を意識しながら安定した後方からのビルドアップは、有効な前線への縦パスや中盤の選手が前を向いてボールを受けることにつながり、攻撃の選択肢を増やすことができ、アタッキングゾーンでの意図的な崩しにつながった。日本の GK は積極的に攻撃に関わるプレーが見られ、GK がパス&コントロールの技術を習得しフィールドプレーヤーとしての能力を備えていたことで安定した組立



につながっていた。

#### テクニックと関わりをもった攻撃

日本は GK を含めて、テクニックを活かして DF ラインで確実にパスをつなぎ、安定したビルドアップから、前線で選手同士がお互いに関わりながら相手の守備を意図的に崩し、ゴールを目指すプレーを見せた。中央の崩しを狙う攻撃が、結果的にサイドにスペースを作ることにつながり、サイドバックが効果的にオーバーラップをしかけチャンスを作った。今大会では組織的な守備を行うチームが増える中、日本は選手個々のもつテクニックと関わりから意図的に相手の守備を崩す攻撃を仕掛けた。

#### チーム全体での統率のとれた守備

日本は相手のボール状況に応じて前線や中盤から連携してプレッシャーをかけ、相手を意図的に追い込み、チーム全体で積極的にボールを奪う守備を行った。相手の攻撃の時にボールのある位置やボールに対するプレッシャーの状況に応じて 4 バックの DF と GK とが連携、連動して DF ラインをコントロールすることにより、相手の攻撃に対して有効なスペースを与えることが少なかった。この結果、中盤をコンパクトな状態に保ち、チーム全体で狙いのある積極的な守備につながった。また、ゴール前の守備においても、ボールに対するプレッシャーとそれに対する周りの選手のシュートコースを意識したカバーリングが徹底されており、GK を含めた粘り強い守備につながった。

#### クロスの攻撃

今大会、日本はグループステージから決勝戦までの 11 ゴールの中で、オープンプレーからの 6 ゴール全てがクロス絡みのゴールであった。宮間、川澄からの精度の高いクロスや相手の守備組織が整う前に GK と DF ラインの間に入れる低くて速いアーリークロスに対して、ゴール前にタイミングを図って飛び込むことでゴールにつながった。また、選手の関わりから両サイドを崩してのクロスからの攻撃に加えて、運動量を活かして労を惜しまずにオーバーラップをする鮫島、有吉のクロスからの攻撃は日本の攻撃の大きな武器となっていた。今後、守備ブロックを作り組織的に守るチームが多くなる女子のサッカーにおいて、クロスからの攻撃の精度を上げてゆくことの重要度は増してゆくものと考えられる。

#### クロスの守備

日本はサイドからのクロスに対して、DF の選手間のマークの受け渡しを含めた確実な準備と正確なポジション取りを行った。このことで、相手よりも先にボールに触るチャレンジが可能になり、相手の選手を自由にプレーさせることなく堅実なクロスの守備を行うことができた。今大会で対戦したチームには体格に勝る選手が多く、ゲームの状況によっては日本に対してシンプルにクロスを蹴ってくるチームやロングフィードを多用して攻めてくるチームもあった。このような攻撃に対しても日本の選手は身体の接触を厭わず地道に競り合いを繰り返してゴールを守った。岩清水、熊谷の CB のヘディングの強さと競り合いの強さは、GK との連携を含めて安定感のあるクロスの守備につながった。体格的には劣る面がある日本の選手が、テクニックとしてヘディングの競り合いを身につけることで、十分に世界のトップレベルで闘えることを実証した。

## 【課題】

### 強いプレッシャーの中のテクニック

今大会では日本と対戦したチームには、日本の特長であるパスを回しながら組み立てる攻撃を止めるために中盤から意図的に強いプレッシャーをかけてくるチームが多く見られた。特に日本が先制点を奪うゲームが多かった今大会では、後半終盤にシンプルなロングボールを DF ラインの裏に蹴り込み、強いでプレッシャーをかけて高い位置でボールを奪いに来るチームが多く、結果としてボールを失い守勢に回ることや、ボールを保持できず相手にペースを握られることがあった。相手の強くて厳しいプレッシャーを受けることでパスコースがずれたり、ボールが浮いてしまいパスをつなぐことができず攻撃のリズムを崩すことが見られた。相手のプレッシャーが強くと激しくなっても確実にボールを保持し、攻撃を組み立てることができる精度の高いパスとコントロールのテクニックを習得することが必要である。また、身体接触をしながらもバランスを崩さず確実にテクニックを発揮するためのコンタクトスキルの習得や身体の使い方を習得することが重要である。今後、世界の女子サッカーにおいて、益々強くなることが予想されるプレッシャーの中で、確実にテクニックを発揮し主導権をもってプレーすることが重要となり、このことが将来の日本の女子サッカーが世界のトップを目指すための生命線となると言っても過言ではない。

### ゲームの流れに応じたゲーム運び

今大会ではゲームの流れの中で、相手チームがロングフィードやシンプルなクロスで攻撃を仕掛けてきた時に押し込まれて苦しいゲーム展開となることが見られた。相手のプレッシャーの速さと強さにボールを失うことが多くなり、劣勢に回る時間帯になった時に得点差や時間帯などゲーム状況に応じてプレーを選択する必要がある。相手の攻撃の意図を読み、前線からプレッシャーを強めてロングボールを蹴らせないことやチーム全体で、パスの質、サポートの質を上げてボールを失わないこと。縦パスが前線に入った時に他の選手の関わりを多くしボールをキープして攻撃につなげるなどが必要である。

また、決勝戦で見たアメリカの前半立ち上がりのスピードと突破力を活かしたパワフルな攻撃に、日本は短時間に失点を重ねゲームの勝負を決められる結果となった。世界のチャンピオンを決める厳しいゲームにおいても自チームのリズムに引き戻す闘い方が必要であった。ゲームの中で予期せぬゲーム展開になった時にも慌てることなく、選手自らがゲーム状況を分析し判断して闘い方を選択し、実行できることが重要である。この決勝戦の闘いの経験を今後のなでしこジャパンの成長の糧としていかなければならない。

### 守備から攻撃への切り替えと質の追求

ボールを奪われた瞬間に相手の攻撃に対してチーム全体で切り替えを速くして守備を行うことは日本のストロングポイントであり、ゲームの中で徹底され随所にその成果は見られた。しかし、守備から攻撃に局面が変わった時にチーム全体でゴールを目指す意識と確実にシュートまでつなげるテクニック。他の選手の関わりと質と量が必要である。組織的に守ることを多くのチームが志向する中、相手の守備組織が整う前にフィニッシュにつなげる攻撃は得点を奪うために今後益々重要となる。選手が連携、連動し、組織的で意図的な守備を特長とする日本のサッカーにおいて、守備から攻撃へ切り替わった瞬間の攻撃の質を上げることは今後世界のトップを目指す闘いを勝ち上がるための重要な要素となる。

### 個の育成の重要性（関わりの中での個の突破力と個の守備力）

今大会において日本はテクニックを活かし選手が関わりながら攻撃を組み立て決勝戦まで勝ち上がった。しかし、今後世界のトップを目指した闘いを勝ち抜きチャンピオンになるためには、相手のペナルティエリアの中でゴールに結びつく決定力を上げなければならない。今大会においても強固な守備ブロックを作り組織的な守備を行うチームが多くなり、今後益々この傾向は強まると考えられると同時にこの強固な守備を打開することができる強烈な突破力と決定力をもった個の存在が重要になっている。常にゴールを意識し、他の選手との関わりの中から積極的にゴールに向かってチャレンジしてフィニッシュに結び付けられるストライカーやドリブラーの存在が重要であり、その選手の育成は急務である。また反面、守備においては傑出した個を守ることができる守備能力をもった選手が重要となり、このような選手の育成が必要になっているということでもある。ポジションの特性を考慮し、サッカー選手としてのオールラウンドな能力に加えて「高さ」や「強さ」や「運動量」などの特長を兼ね備えた個を育成することが強い組織を創り、強いチーム創りに繋がっていくものと考えられる。

## 7. アジア勢の闘い

今大会から出場国が 16 チームから 24 チームになったことで、アジアからは日本と共に中国、韓国、オーストラリア、タイの 5 チームが出場した。そのうちグループステージを勝ち抜いたのは、日本、中国、韓国、オーストラリアの 4 チーム。さらにベスト 8 まで進んだのは、中国、オーストラリア。そして日本は 2 大会連続で決勝進出を果たし 2 位となった。今大会は日本だけでなくアジア勢が躍進した大会といえる。これまでの女子ワールドカップの歴史を振り返ると、中国が 1995 年にスウェーデンで開催された第 2 回大会(12 チーム中)で 4 位、続くアメリカで開催された第 3 回大会(16 チーム中)で 2 位という結果が残っている。そしてドイツで開催された前回大会では日本がアジアの国として初優勝を遂げ、今大会でも 2 位という好成績を収めた。世界ランキングこそアメリカ、ドイツ、フランスといった欧米の国々が上位を占めているが、アジアの女子サッカーが世界を刺激し、今後の女子サッカーのさらなる発展の鍵を握っているといえるのでないであろうか。しかしそれは同時に、あらゆるカテゴリーにおいて急速にレベルアップしているアジアを勝ち抜かなければ日本は世界に出て行くことが出来ないということでもある。

ここでは今大会に出場したアジアの国々のパフォーマンスから現状を分析し、アジアにおける日本の立ち位置を確認してみた。

### オーストラリア

アメリカ、スウェーデン、ナイジェリアと同じグループ D を 1 勝 1 敗 1 分けの勝ち点 4、グループ 2 位でノックアウトステージに進んだ。ラウンド 16 では前評判の高かったブラジルに競り勝ち、準々決勝では日本と対戦し接戦の末に敗れた。

パワーと迫力ある攻撃はシンプルで縦に速いのが特長。GK からのフィードは丁寧でプレッシャーの緩いエリアではポゼッションを志向するところはアジアのチームらしいが、プレッシャーがかかるとロングボール主体で FW の身体能力の高さを活かしてゴールに迫る部分はヨーロッパの多くのチームに似ている。ゴール前でブロックを作った相手に対し、それを意図的に攻撃するアイデアが不足していた。意図的に崩すためのアイデアがあれば準々決勝の日本戦は違った結果になっていたかもしれない。守備は積極的に高い位置からコレクティブな守備を目指す、連動・連携といった観点からは十分であるとは言えない。1 トップのため、ボールへのアプローチや方向付けが有効でなく相手に制限をかけることが難しかった。また、予測という観点からはボール状況に応じた正しい守備のポジションを取ることが課題。基本的なテクニックのミスも多く、プレッシャーの中で生きるテクニックの積み上げは必要である。そして一番の課題は持久力であり 90 分を通してゲームを戦い切ることはないだろうか。後半になって運動量が落ちると極端にパフォーマンスが低下し、完全に相手に主導権を渡してしまった状態になるのは残念であった。しかし、フィジカルの強さをベースとした攻守における 1 対 1 の強さと球際の強さは日本も見習うべき点である。ブラジル戦では対戦相手をスカウティングし、明確なゲームプランのもと柔軟なシステム変更に対応できる理解力の高さもみせた。

日本に対しては昨年のアジアカップの決勝と今大会と連敗になったが、その差は確実に縮まってきていることを実感させられた。

## 中国

ホスト国のカナダ、オランダ、ニュージーランドと同じグループAを1勝1敗1分けの勝ち点4、グループ2位でノックアウトステージに進んだ。ラウンド16では日本と同じグループCを2位で勝ち進んだカメルーンとの対戦に勝利した。準々決勝ではグループステージでは本来のパフォーマンスを発揮できなかったアメリカと勢いに乗る中国の対戦となった。しかし、本来の輝きを取り戻したアメリカを前に、中国は自分たちの持ち味を発揮することなく敗れた。

今大会の中国代表は、従来中国の女子選手のイメージを大きく変えて、非常に身体能力が高く洗練されたアスリートをサッカー選手として鍛えてきた印象を持った。そのハードワークはすべての対戦相手を苦しめた。コンパクトフィールドを形成し、攻守にわたって組織的なプレーをみせた。それを90分走りきることができるフィジカルの強さで支えていた。守備では高い位置から積極的にチャレンジ&カバーを繰り返し、意図的にボールを奪うことを試みていた。守から攻への切り替えも速さもチームコンセプトとして浸透していた。攻撃においては奪ったボールを、そのままパワーを持ってスピードのある前線の選手で攻め切る狙いを徹底していた。2列目の選手やサイドの選手も労を惜しまず長い距離を走りサポートした。しかし、スピードを止められた時にどのように関わりを持って崩すかが課題。ブロックを作って組織的に守る相手に対しても判断無く機械的に攻撃を繰り返している様にも見えた。意図的な攻撃でゴールを目指すならば、相手の状況を観て判断し、自らがプレーを選択する力が必要であり、アメリカのような格上のチームとの対戦において流れの中からゴールを奪うことは難しいだろう。

中国は日本が優勝した前回のドイツ大会でワールドカップへの出場権を逃し、第1回大会からの連続出場の記録が途絶えたため、今大会にかけの思いはなみなみならぬものがあつたと思われる。中国は前回大会の出場を逃した時に大きな危機感を感じ、育成年代からの強化に大きく力を注いできた。その成果もあり、非常に若くて才能のある選手が発掘されている。今大会の最優秀ヤングプレーヤーにノミネートされた3名のうち1名が中国の⑬TANG Jialiであったことは偶然ではないだろう。中国はこれからも日本にとってはすべてのカテゴリーにおいて、アジアを勝ち抜くために超えなければならない大きな壁となるに違いない。

## 韓国

ブラジル、コスタリカ、スペインと同じグループEを1勝1敗1分けの勝ち点4、グループ2位でノックアウトステージに進んだ。ラウンド16では優勝候補にも挙げられていたフランスに3対0で敗れ、トップレベルとの実力差を見せつけられたもののワールドカップ初出場でのノックアウトステージ進出という成績を残した。グループステージ第3戦のスペイン戦ではともに勝たなければ次のステージに進むのは絶望的な状況の中でスペインに先制を許したものの逆転で勝利し、自力でノックアウトステージ進出を決めたことで世界の舞台で戦う自信を得たに違いない。

コレクティブなサッカーを志向し、GKから丁寧にビルドアップしてボールを動かしながらゴールを目指した。しかし、攻守において課題は多い。攻撃においてはDFラインや中盤でも低い位置で相手のプレッシャーがかからないエリアではポゼッション出来ても相手のプレッシャーが強くなるとパスの質やタイミングにミスからボールを失うことが多くなる。フランス戦ではFWの動き出しのタイミングも悪く中盤からFWへボールが入らなかった。相手を観ながらプレーしようとする意図は感じるがフランスのプレッシャーに対し、単純なテクニックのミスで簡単にボールを失うことが多く、主導権を握ることは出来なかった。意図的な攻撃をするためには、テクニックの向上と効果的に関わるためのタイミングを積み上げていく必要性を感じた。守備では

ロックを形成し、コレクティブな守備を試みているが精度は高くない。攻撃から守備に切り替わった際のポジショニングが悪いため、ファースト DF のアプローチが効かないところに 2 人目 3 人目がルーズに関わるのでボールを奪いきれない。人数が揃っていても効果的でない場面が見られた。GK も安定感が無く、守備を統率することは出来なかった。

⑩JI Soyun はプレッシャーの中でもボールを失わないテクニックとアイデアを持ち、他との違いを見せていた。

韓国も中国同様に育成年代にも力を注いでいる。今大会に参加したフィールドプレーヤーには若い選手が多く、ワールドカップでの経験が今後の成長に拍車をかけることが予想される。

## タイ

アジアではヴェトナムとのプレーオフを制し 5 枠目の出場権を得た。韓国と同じくワールドカップ初出場のタイは、世界ランキング 1 位のドイツ、ノルウェー、コートジボワールと同じグループ B で 1 勝 2 敗の勝ち点 3、グループ 3 位となった。各グループの 3 位のうち成績上位 4 チームがノックアウトステージに進むというレギュレーションの中、勝ち点 4 のオランダとコロンビア、そして勝ち点 3 のタイ・スイス・スウェーデンの 3 チームの中からスイスとスウェーデンがノックアウトステージへ進んだ。タイは負けた試合での失点の多さが最後に響き、得失点差でノックアウトステージに進むことは出来なかった。

アジアのチームらしく丁寧にボールを繋ぐサッカーに取り組んでいた。チーム全体で一体感を持って戦ったが、テクニック不足が原因で攻守両面において意図したプレーをすることが難しかった。守備にまわる時間が長く、カウンターからの攻撃を試みるもテクニック不足で簡単にボールを失うことが多く決定機に繋げた回数は少なかった。守備においてはチーム全体で意識を高く持ち粘り強く戦ったが、守備の基本的なテクニックが低いため、相手の個による突破を許すことが多かった。しかし、第 2 戦のコートジボワール戦では、最後まで集中を切らすことなくひたむきなプレーを見せ、競った試合を 3 対 2 で勝ち切った。この勝ち点 3 はタイの女子サッカーにとって大きな意味を持つだろう。

アジア全体のレベルアップが日本のレベルアップに繋がることは、男子と同様である。今大会の分析からも多くの部分で日本がアジアをリードしていることは間違いない。しかしアジアの各国が育成から力を入れて日本が志向するサッカーを目指している現在、その優位性がいつまで保てるかは分からなくなっている。日本もさらなる高いサッカーの理想を掲げ、そのために取り組まなければならないことを明確にし、それを実践していかなければ世界に出る前にアジアを勝ち抜くことが難しくなるだろう。

## 8. 育成への示唆

前回のドイツ大会後の TSG 報告では、女子のワールドカップが、「よりテクニカルに、スピーディーに、コレクティブに」進化しているという分析がなされた。その大会でテクニックに優れ、豊富な運動量で攻守においてコレクティブなサッカーを志向した日本が優勝したことは世界の女子サッカーの新しい時代の到来を感じさせるものであった。あれから4年が経過し、世界のサッカーがどのように進化し、世界における日本の立ち位置がどうなったのか、そして日本が今後常に世界のトップにチャレンジできるようにするためには何をしなければならないのかを考えるために日本の闘いと他の国々の闘いを比較し、日本の育成年代の選手・指導者にフィードバックすべきことを以下にまとめてみた。

### Japan' s Way

ここ数年、日本国内の選手育成の場では、足りないものは高める努力を最大限しつつも、世界基準よりも勝っていくべき日本人のストロングポイントをさらに伸ばしていき、それを活かして日本人らしいスタイルを創り、戦っていくという考えを「Japan' s Way」という言葉で発信をしてきた。世界との比較の中で現状の日本の特長的な部分は男女では若干の違いがあるが、この「Japan' s Way」という考え方は男女共通のものである。

今回の日本の試合ではどのくらい Japan' s Way が具現化されていたであろうか。サッカーにおいて日本人の良さを活かすための基本となるテクニック（技術+判断）、攻守に関わり続ける個人戦術、持久力（運動量）という観点から考察してみた。

### テクニック

多くの国が攻守にコレクティブなサッカーを志向するものの、日本との違いが一番大きいのがテクニックである。昨年、コスタリカで開催された U-17 のワールドカップでも同じことが言えた。日本のテクニックという優位性は世界が認めるところである。しかし、今大会の日本のパフォーマンスを検証した場合、他の多くの国よりは優れていたものの、上位を狙う国々との比較ではその優位性は決して高くはなかった。意図のないスピードの遅いパスが多く、度々パスがずれ、ボールが浮いてしまっていた。ボールコントロールもファーストコントロールが意図したところに納まらない場面が多くみられた。人工芝であったことを考慮しても、アメリカ・ドイツ・フランスのそれとは明らかな違いがあった。パス&コントロールのミスは、そのミス自体ですぐに相手ボールにならないまでもチャンスに繋がれず、攻撃のリズムを崩していた。守備面では失点に繋がらないパスやコントロールのミスでも相手から不要なプレスを受けてしまい、付け入る隙を与えることに繋がった場面は少なくなかった。テクニックと言っても、単にボールを止めて蹴ることやボール扱いのことだけにとどまらず、状況に応じて判断し適切に発揮することを前提として、ボールを思い通りに扱えるようになっていくことが重要であることは言うまでもない。判断の伴ったテクニックや動きながらのテクニックをもとに攻守に主導権を握ることを目指す日本のサッカーにとって、基本的なテクニックはチーム戦術の生命線であるといえる。しかし、このテクニックの質の低下がすべてのパフォーマンスに影響を与えていた。優勝を狙う強豪国との対戦での勝敗のポイントはいくつもあるが、日本がテクニックの部分で違いを見せられなければアドバンテージを握ることは難しい。テクニックの質へのあくなき追求はこれからも突き詰めていかなければならないテーマであると言える。

### 攻守に関わり続ける個人戦術

攻守に関わり続けるコレクティブな日本のサッカーは、他の国々のサッカーとは確実に違いを見せていた。これは経験値の高い選手が多かったことがさらなるアドバンテージになった。今大会で日本が苦しい戦いを続けながらも決勝まで進むことが出来た要因は、選手一人一人の攻守に関わり続ける個人戦術の理解の高さではないだろうか。グループステージから思うような試合運びをすることはできなかった日本だが、それでも現地にいた時に日本のサッカーを賞賛する声を聞くことが多かった。FIFA の関係者の間でも同様の声が上がっていたと聞く。それだけ日本のプレースタイルに対する評価は高く、リスペクトされている。しかし、これが今回選出された選手だけのストロングなのではなく、世界に対して常に日本のストロングであると言い切れるようになるためには育成年代から攻守に関わり続ける個人戦術の理解の高い選手を育成していかなければならない。

### 持久力（運動量）

今大会、最も気になったことの 하나가 チーム全体の運動量である。グループステージでは 90 分を、ノックアウトステージでは延長も見据えた 120 分をいかに闘うかということが重要となってくる。しかし、一試合を闘い切るだけの体力を持たないチームは、そのことが直接的にパフォーマンスを低下させ、試合結果に大きな影響を与えていた。つまり前半と後半で全く別のチームのようになってしまう国が多かったということだ。

では日本はどうだったのか。攻守に関わり続け、主導権を握るサッカーをするためには、テクニックと同じくハードワークが不可欠である。日本はハードワークの習慣化という点では世界でトップクラスであった。今大会でも日本のハードワークという特長は随所に見られた。それでもグループステージの 3 試合は、いずれの試合でも運動量で相手を圧倒することはできなかった。試合の終盤では必ずといっていいほど相手に押し込まれて防戦一方となる時間があった。ノックアウトステージに入ってからサイドバックの積極的なオーバーラップが多くなりチーム全体の運動量は増えたように見えた。ただし、オランダもオーストラリアも後半の運動量という点では課題を抱えているチームであった。ここで見逃してはならない点は、持久力といった体力面だけが問題なのではなく、ゲームの流れを読んでチャンスやピンチを感じることを、それをチームで共有する力が大切であるということ。さらに走行距離とイコールの運動量以上に重要なのは、必要なタイミングでのスプリントの回数である。今大会、日本は長い距離のスプリントが少なかった。試合終盤であっても必要な時にスプリントを繰り返すことが出来るという体力的な裏付けが重要である。育成年代ではゲームの流れを読んでチャンスやピンチを感じる力を養うことと計画的なトレーニングの中から一試合を走り切る体力を求めていく必要がある。

Japan's Way という言葉で発信している日本人の良さを活かすためのサッカーの基本であるテクニック、攻守に関わり続ける個人戦術、持久力は育成年代でこそ身に付けられるものである。女子サッカーに携わるすべての指導者が共有して取り組むべき課題である。

### 守備

守備に関しては多くの国が高い意識で組織的な守備に取り組んでいた。しかし、ほとんどの国は意図的にボールを奪うところまでは出来ていなかった。そんな中でも強豪国といわれるチームは基本となる 1 対 1 の守備でボールを奪えるチーム、奪う意識が高いチームであった。それでは日本は強豪国といわれるチームの守備が



出来ていたであろうか。組織的な守備から意図的にボールを奪おうというスタイルでは世界をリードしているといえるが、1対1の守備という部分においては大きな差がついてしまっていた。組織的な守備を志向するあまり、まず守備は数的優位な状況で守ることを第一に考えているような風潮にある。これは育成年代においても同じことがいえる。コレクティブに守備をするとすれば当然相手が保持するボールに守備で関わる人が多くなるので、そのこと自体は悪いことではない。しかし、まずは1対1の状況で奪える能力があるのと奪えないから人数をかけて奪うのとでは大きな違いがある。さらに守備での対応が悪く1対1で抜かれてしまった後の対応も日本には足りないものがあつた。これは主にFWなど前線のポジションの選手に関係するが、他の国の選手は、抜かれた本人が追走しながらさらにボールを奪いに行き、奪い返さないまでも攻撃者に対してかなりの制限を加えている。しかし、日本の選手はカバーに帰ることを優先することが多かった。状況によってはカバーに帰ることが必要なときもある。しかし、まずはボールを奪うことに対する意識、1対1の守備に対する意識を変えていかなければならないと強く感じた。日本の育成年代では男子でも守備が課題であるとしてトレセンなどでもかなりの時間をかけて取り組んできているが、女子ではこれまで以上に強く発信して、さらに時間をかけて取り組んでいく必要がある。

## 攻守の切り替え

守備の部分でも触れたように守備の意識が高まっているので、攻守の切り替えでは特に攻撃から守備への切り替えは非常に速くなっている。しかしファーストDFのアプローチの質やセカンドDFのポジションの悪さから効果的な守備に繋がっていない国が多かった。守備から攻撃への切り替えは持久力の中でも述べたように、切り替わった瞬間の状況を判断し、縦へのスピードを上げるのか、それとも落ち着いてボールを回すべきなのかを選択しなければならない。そしてこの判断を多くの選手で共有することが大切なのだが、経験値に高い選手が揃った日本はこの共有するという部分においては他の国よりもリードしていたのではないであろうか。日本の育成年代の試合を見ても攻守の切り替えの意識は確実に高まっている。しかし、その切り替えが速くなったことだけを評価しないで、切り替えた後の質を追求していかなければならない。そのためには指導者が切り替えた後の攻撃と守備の明確なイメージを持ち合わせていなければならない。選手も指導者もそこまでの繋がりをもって攻守の切り替えととらえていかなければならない。

## 攻撃

攻撃において一番感じたのは、ブロックを作っている相手に対して、意図的な攻撃でゴールに迫れるチームは極めて少なかったということである。攻撃力の高いチームでも迫力あるカウンターでゴールに迫ることは出来ても、カウンターを止められた時に持っている攻撃の選択肢が少なかった。カナダ、オランダ、オーストラリア、イングランド、中国などは良いサッカーをしながらも勝ち上がれなかった理由の一つは攻撃の選択肢の少なさであったと言える。日本対オランダの試合でゴールを決めた阪口のシュートに対する賞賛は彼女のシュートテクニックに対してだけでなく、多くの選手が関わったゴールへの過程も含まれている。しかし日本にも課題はあつた。関わりの多い攻撃が魅力的である反面、個人での仕掛けという部分では他の強豪国に大きく見劣りがしたのも事実であった。今大会の日本は、FWの選手のゴールは多くはなかったが、FWの選手のタイミング良いアクションや献身的なランニングのお陰で他の選手にゴールが生まれていた。しかし、日本がアメリカ、ドイツ、フランスなどの強豪国に勝るためには、個人で積極的に仕掛ける技術を身につけることと常に相手のゴールに向かってコントロールしゴールを奪える選手の育成は緊急の課題であると言える。

## 気づいたこと、感じたことを伝える能力

これまでコミュニケーションという言葉でいわれてきたことを、より具体的に発信していく必要があると感じた。これまでも仲間を思いやること、仲間の気持ちを察することを日本のメリットとしてとらえられてきた。現に今大会で日本が難しい試合を確実に勝ちに繋げてきたことは、ピッチで戦う選手とベンチの控え選手、スタッフが同じ気持ちで闘った結果であろう。このことは日本が経験値の高い選手の集団であったことも大きな要因と考えられる。しかし、日本の選手が察する気持ちと思いやりの気持ちだけでひとつにまとまっていたかと言えば、そうではないはずだ。テレビ放映で伝わった部分もあると思うが、見逃してはならないのは一人一人が試合の状況を把握し、自分の考えや仲間に求めたいことを声に出して伝え合うことが出来ていたということだ。我々指導者はこの必要性を重々承知しながら「コミュニケーションを取ろう」という言葉だけを選手に伝えることで終わらせていないだろうか。この伝える能力はキャプテンやベテランの選手だけに必要なことではなく、すべての選手に必要な能力なのだというを日本の戦いを見ながらあらためて強く感じた。理解のない選手が声に出して伝えることは出来ない。出来ないということはサッカー選手に必要な能力が一つ欠けているとも言える。大人しいなどといった性格の問題として終わらせてはいけない重要な問題である。

## 自立した選手の集団に

これまで日本のメリットと言われていた部分をさらに伸ばし、強豪国に対しても明らかなストロングとしていくための努力。苦手な部分を克服し、強豪国に対しても引けを取らないものにしていくための努力。勤勉な日本人ならば、今後もこれらの努力を惜しむということはないだろう。しかし、どれだけ時間をかけても、選手一人一人が自立できていなければその効果を期待することは難しい。想定通りの展開でなかった時、日本の選手たちはベンチからの指示だけを頼りにしないでピッチの中で考え、判断し、伝え合っていた。どのような状況下でも、自分で考え、判断できる自立したサッカー選手を育成していくことが何よりも急務である。この課題を日本全体で共有し、指導の現場において選手の自立を促す指導を実践していかなければ、オリンピックでもワールドカップでもメダルはおろか出場することすら危ういものになってしまう。

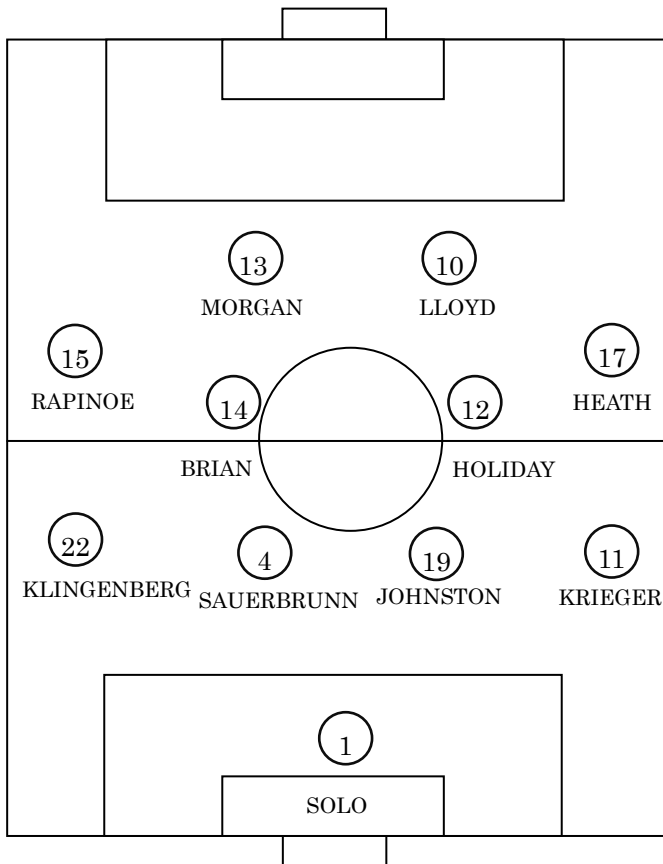
## テクニックの追求に男女差はない

大会を通して、最も感じたことがテクニックの追求に男女差はないということである。スピードやパワーでは劣るものの、それ以外に求めるべきものは男子と同じである。特にテクニックに関して言えば、上手く出来ないことは性差ではなく個人の意識の差である。今大会において正確なロングキックが出来る選手は多くの国の選手に存在した。その正確なキックが試合の流れを変え、特にコーナーキックなどのセットプレーでは試合を決定づける効果があった。ヘディングはクリーンに競り合いながら、意図的に味方に繋ぐシーンが多く見られた。ゴール前では身体を張ったスライディングをし、相手と並走しながらの場面ではスライディングでボールを奪い切って攻撃に繋げた。キレのあるカウンター攻撃、迫力のあるミドルシュート、相手を背負いながらのターン、動きながらファーストタッチでギャップを狙うなど、育成世代の選手には男女に関わらず、お手本にしたいプレーが数多く見られた。

世界で活躍できる選手になるためには、時間とスペースのない中で発揮出来る、判断の伴ったテクニックを身につけなければならないことは言うまでもない。特に育成年代においては得手不得手なくあらゆるテクニックの獲得を目指して欲しい。

## 9. ベスト8のチーム

### アメリカ 優勝



#### 【チームコンセプト】1-4-4-2

攻守にわたりコレクティブに関わりを持ちながら、サッカーを展開していくスタイル。ボールを動かしポジションしながらボールを前に運んでいき、チャンスであれば前線を意識してFW⑬⑩を起点にゴールへと向かう。守備はボールを奪う意識が高く、攻守において切り替えも早い。

#### 【攻撃】

DFラインからボールを動かし、左右縦と状況を観ながらプレーをしている。サイドバックの攻撃参加も積極的でサイドで有効な数的優位を作り出している。FW⑬⑩のボールを受ける動きやゴールへ向かう推進力など個々の能力が高い。SH⑮⑰の縦への仕掛けや中に入ってSBと関わりを持ちながら、サイドで攻撃の起点を作っていた。CB⑱のロングキックの正確性やSB⑳⑪の関わり、⑭⑫の中盤での関わり、全体的にスピードがあり運動量が多い。ゴールに向かう意識が高い。

#### 【守備】

攻守の切り替えが早く、失ったら素早くボールへアプローチし奪い返し、攻撃につなげていた。前線で奪えなくてもアプローチしていることで、中盤やDFラインでボールを奪う場面が多く見られた。CB④⑱のインターセプトの意識や1vs1の強さが見られた。また、GKは、ボールを奪う意識や守備範囲が広く、シュートに対する反応やビッグセーブでゴールを守っていた。

#### 【リスタート】

CKのキッカーは⑰。キッカーのキックの種類が豊富。状況を観て配球できる。様々なパターンを持っている。CKの守備はゾーン。④ロングスロー。

## 日本 準優勝



### 【チームコンセプト】1-4-4-2

攻守に主導権を握り、ボールを動かしながら組み立て、攻守においてコレクティブに組織で戦うスタイル。切り替えの速さや運動量、全員が関わりを持ち攻守一体となり、粘り強い戦いをしていた。

### 【攻撃】

GK から DF ラインにボールをつなぎ、DF やボランチが関わりながらボールを動かし、相手選手の間で相手と駆け引きしながら、ボールを受ける。前線 2 人の FW が連携をして⑩がポストとなりボールを受けて、⑪がスペースへ流れ、攻撃のきっかけを作ると、SH⑧がこれに関わり、空いたサイドのスペースに SB⑤⑱がオーバーラップし、サイドからチャンスを作っていた。局面で関わりを持ち、数的優位を作り出し打開していた。また、相手の状況を観ながら、空いているサイドへの展開や DF 背後への狙いなど見られた。

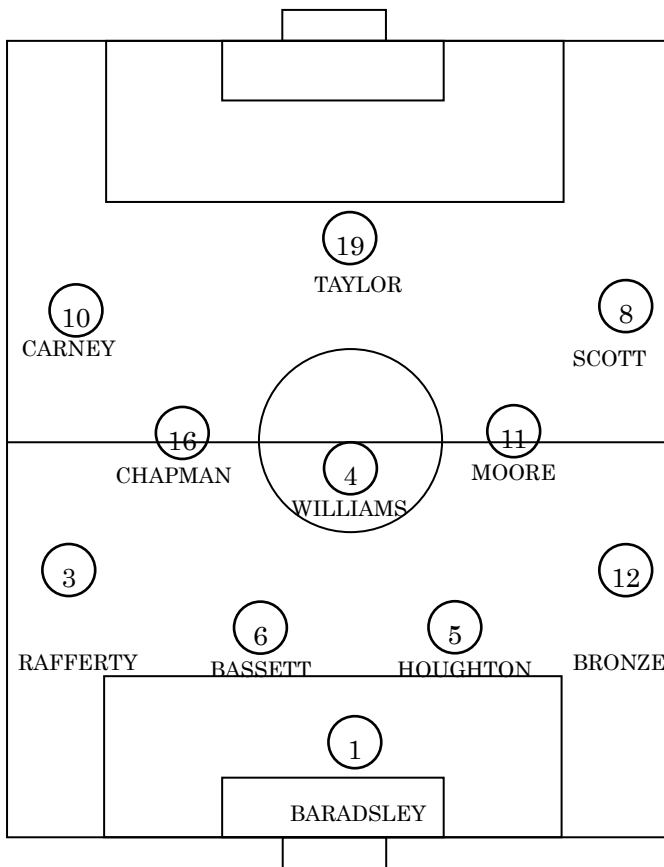
### 【守備】

攻守の切り替えへも早く、コレクティブに 3 ラインを整えて、守備のブロックを形成していた。前線の選手の意図的な追込みから、DF ラインをコントロールし、MF・DF の選手が狙いを持ち、数的優位を作り出しボールを奪っていた。また、ボールを奪ったからの攻撃への切り替えも早い。

### 【リスタート】

⑧キッカー。さまざまな質のボールを蹴ることができる。GK 時、入る選手が列を作りマークされにくくしていた。GK の守備はマンマーク。

## イングランド 3位



### 【チームコンセプト】1-4-3-3

全体的に攻撃の優先順位を意識して、攻撃を組み立てている。ゴールへの意識が高く、FWへの縦パス、ロングボールが多くみられる。SHの選手も縦への意識が高く、サイドからの攻撃も見られた。守備は中盤に3人を配置して、DFラインと中盤の3人で構成されている。

### 【攻撃】

GKからDFラインへの配球し、ボールを動かしているが、そこから素早く前線の選手へロングパスする場面が多く見られた。⑩をターゲットにして、サイドのスペースへの動き出しに対してロングボールを配球。⑩⑧のスピードとパワーを生かして、サイドで縦への個の仕掛けから突破。SBは高い位置をとるが攻撃への関わりは少ない。

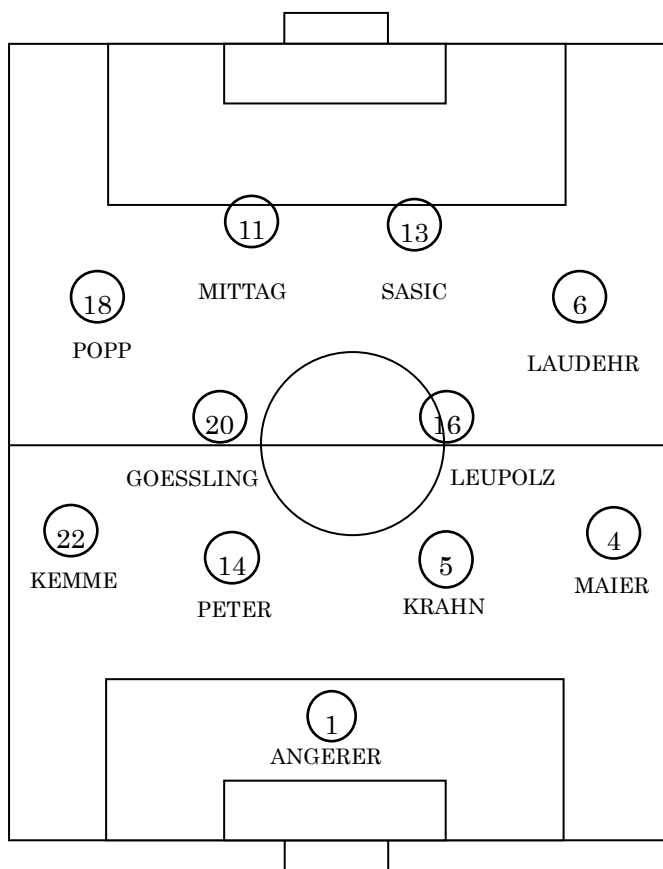
### 【守備】

コレクティブに守備組織を形成し、前線からプレスをかけてボールを奪うスタイル。⑩が追い込みをかけることで、後方は限定されてボールを奪いやすい状況を作り出していた。中盤の3人の選手とDFラインで人数をかけて、入ってきたボールを狙う。全体的に球際の強さやボールを奪う意識は非常に強い。コレクティブにハードワークしていた。

### 【リスタート】

キッカー④。さまざまなボールを蹴ることができる。サインプレーを多用。⑤が前線に上がってターゲットになる。

ドイツ 4位



【チームコンセプト】1-4-4-2

選手個々の持つ身体能力、ゴールを目指すこと、ゴールを守ること、チームとしての闘い方が統率されている。攻撃は組み立てるというより、シンプルに前線にボールを運び、ゴールを狙うスタイル。守備も連動してというより 1vs1 でボールを奪いに行くスタイル。GKの存在感、テクニック、パワー、ゴールを守る雰囲気素晴らしい。全体的に個に頼る面はあるが、攻守両面で統一感を持って闘うチームである。

【攻撃】

GKからDFラインへは、ボールを動かしているが、最終的に前線にいるFW⑬⑪をターゲットにロングボールによる配球が見られた。ゴールへ向かう意識は非常に高い。SH⑥⑱も関わり、ボールを受けたら縦への仕掛けが多い。クロスからチャンスを狙う。また、⑳④の両SBも運動量が豊富で、サイドのスペースに何度も駆け上がりチャンスを創っていた。前線の選手の仕掛ける、ゴールへの意識、ゴール決める能力は極めて高い。

【守備】

攻撃から守備への切り替えはチーム全体で徹底されていて、ボールを奪われるとファストブレイクを抑えるためにボールにプレッシャーをかけ相手の素早い攻撃を抑えた。最終ラインの4バックはCB⑭⑤と中盤の⑱⑳を中心に守備を組織し、強固な守備を行い、特にゴール前では GK①と連携して身を挺してゴールを守り、失点を許さない粘り強い守備を行った。また、中盤はコンパクトに保ち、チャレンジとカバーを繰り返し、ボールを奪う積極的な守備を行っていた。

【リスタート】

基本的には、シンプルにゴール前に蹴り込むスタイル。ゴール前への入り方は工夫が見られる。競り合いやコンタクトスキル、パワーなど迫力がある。キッカーは⑳。

中国



【チームコンセプト】1-4-4-2

攻守にわたりコレクティブにチームとしてグループとして全体がハードワークして戦っている。攻撃はボールを動かしながら、FW⑨を起点にして組み立てている。守備はブロックを形成して、ゴール前を固めている。

【攻撃】

ボールを動かしながら、FW⑨をターゲットにして、攻撃を組み立てていくスタイル。DF や SH から⑬がボールを受けて展開し、パスを配球していく。DF ラインからのロングボールに対して、FW⑨がタイミングよくマークを外しボールを受ける。全体的にハードワークし、スペースへのランニングや全体の関わりなど、運動量もある。GK のキックの飛距離があり、ロングキックからの展開もみられた。

【守備】

守備において 4 バックの統率のとれたラインコントロールから、チーム全体でコンパクトな守備ブロックを作り、チャレンジとカバーを組織的に繰り返し、積極的にボールを奪いに行く守備を行っていた。攻守の切り替えも早く、コレクティブに守備組織を形成していた。

【リスタート】

GK ゴールキック時にワイドにポジションをとり、逆サイドSHへの配球もみられた。GK のキッカーは⑬、守備はマンマーク

## オーストラリア



### 【チームコンセプト】1-4-3-3

シンプルに縦に速い攻撃。GKからのボールリリースは丁寧だが、その後は丁寧なビルドアップというよりもシンプルに縦に速い攻撃。SH⑩がスピード・パワーに優れ積極的に仕掛けてくる。また、対戦相手に合わせて戦術を変えることができる。

### 【攻撃】

GKからボールをDFラインにつなぎ、攻撃を組み立てようとするが、前線やサイドの選手へのロングボールが目立ち、個人のドリブルでの仕掛けや中盤からの単調なクロスの攻撃が多く見られた。⑩⑨はサイドでスピードを生かして縦への突破やゴールへ向かう意識は高い。

### 【守備】

対戦相手や試合状況によって守備組織を変えながら、対応していた。基本的に⑧をアンカーに置き、DFラインと連携をとりながら守備を構築していた。ボールを奪う意識や球際の強さ、1vs1の強さなどは見られた。

### 【リスタート】

GKの守備はゾーン



## カナダ



### 【チームコンセプト】1-4-3-3

GKからDFへつなげて組み立てていく。ボールを動かさずDFから前線の選手やスペースに動き出す選手へのロングボールでの配球が見られた。守備は攻守の切り替えが早く、組織として守備を構築していた。

### 【攻撃】

前線は、3トップ。ゲーム中に流動的にポジションチェンジをしながら、FW⑫を起点にDFから前線へのボールの配球が多く見られた。また、相手DF背後のスペースへ中盤からMF⑫のランニングなど、スペースへの動き出しも見られた。⑪が中盤でバランスをとっていた。DF③ボール奪って、自らボールを持ち運び、攻撃に参加するシーンも見られた。

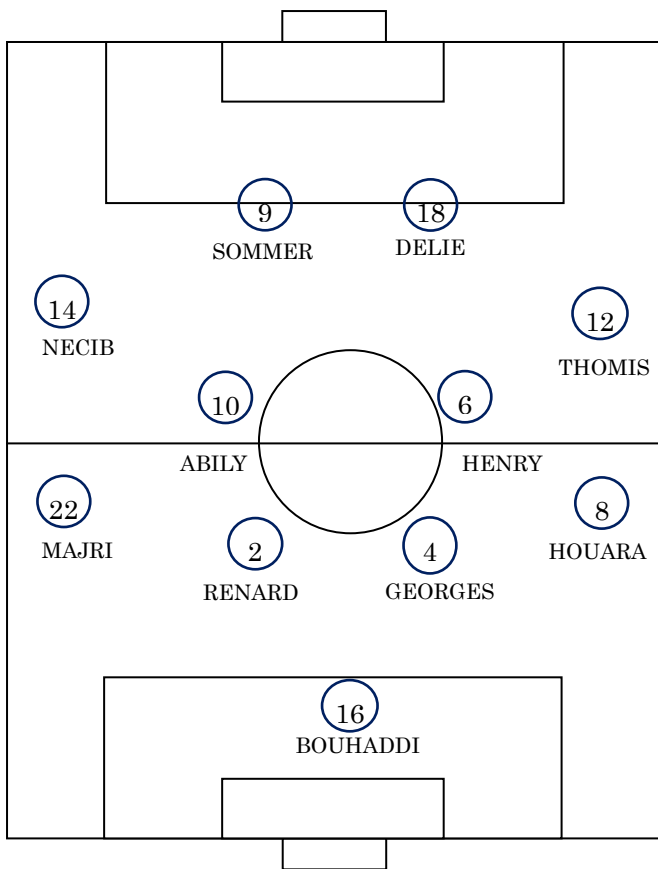
### 【守備】

3ラインでコンパクトに守備を構築し、⑫の前線からのプレスで方向づけて、ポランチに入るボールやロングボールに対しての対応をしている。中盤では⑪が中心。相手ポランチに対してはMF⑬⑫がケアをし、相手FWに対してDF③が対応してボールを奪う。攻守の切り替えは早く、チーム全員の守備に対する意識は高い。DFラインをコントロールしてコンパクトな守備ブロックを作り、粘り強く守備を行っていた。

### 【リスタート】

GK FKともにキッカーは⑬

## フランス



### 【チームコンセプト】1-4-4-2

個々のもつテクニックを活かし、ボールをポゼッションしながら、多くの選手が流動的に関わりながら、ゴールを狙う攻撃を展開した。守備では攻撃から守備への切り替えをチームで徹底し、個々のもつ守備能力の高さベースに組織的な守備を行った

### 【攻撃】

GKから攻撃を組み立て、全体で関わりを持ちながら、展開力を持つ⑥⑩のボランチが攻撃を組み立てていた。2トップの⑫のポストプレーに⑨の関わり、SH⑭⑯がサイドのスペースを使いながら流れるような攻撃を展開した。特に前線の選手は状況に応じて流動的にポジションを変えて、ドリブル、パスによる意図的で積極的な攻撃で何度も相手の守備を崩し、チャンスを作った。また、SB⑲⑳のオーバーラップも有効に機能し、チャンスを作っていた。全体で関わりを持ち、コレクティブに攻撃を組み立てていた。

### 【守備】

攻撃から守備への切り替えはチームとして徹底されており、前線、中盤でチャンスがあれば選手が連携連動して積極的にボールを奪いに行き、相手の守備組織が作られる前にゴールを目指した。CDF②④は常に安定した守備組織の要としてチームの強固な守備を支え、⑩⑥は中盤の守備を積極的に行い、相手の攻撃を抑えた。攻撃同様守備においても、個々の能力がチームとして機能したレベルの高い守備を行った。

### 【リスタート】

GKの攻撃、右からは⑲が左足で、左からは⑩が右足で、インスイングでニアに速いボールが多く見られた。守備はマンマーク。

## 10. ゴールキーパー

今大会では、コレクティブなサッカーの要素が進化している現代サッカーの中で、ゴールキーパー（GK）の役割、関わりの重要性を改めて感じる大会となった。その中で、全体的に「ゴールを守る」「ボールを奪う」「攻撃参加」と3つの局面の中で、安定したGKが見られた。特に、上位に進出したチームには、経験豊富なGKが存在し、チームの勝利に対して攻守において貢献し、1/11の中のGKとしての役割を示していた。

コレクティブに攻守が一体となってサッカーが展開されていく中で、DFラインと距離感と保ちながら関わりを持ち、ボールを奪うシーンや、ゴール前の守備においてDFと連携してシュートコースを限定して、GKがゴールを守りやすい状況を作り出すなど、GKだけでなく、よりチームとしてゴールを守るという守備組織が形成され、その中でGKのプレーの質が目立った。また、攻撃参加においても、GKから攻撃の組み立てがスタートするシーンが多く見られた。以前であれば、ゴールキックやGKがキャッチしてからの配球をみるとロングボールが主流であったが、今大会では、ショートパスでDFラインにボールをパスして、組み立てていくシーンが多く見られた。また、攻撃の優先順位を意識して、相手の守備組織が整う前に、素早く前線の選手へ配球するシーンも見られ、攻撃参加におけるGKの役割の多様化が進んでいるように感じた。

### 【ブレイクアウェイ】

守備においては、コレクティブに守備組織を形成する中で、DFラインの背後のケアをするGKや、守備組織が整わない中で、相手チームがダイレクトプレーを意識して、ロングボールでDF背後のスペース狙ったパスに対してGKがDFライン背後のスペースを広く守る場面が見られた。また、全会場が人工芝ということで、天然芝とは違うバウンドやスリッピーな環境で、予測や判断において、プレーの質が求められる状況になっていた。その上で、良い準備をし続けること、状況把握、プレーの決断の質が求められるものとなった。

### 【クロス】

全体的には、クロスに対する守備範囲の拡大、技術の発揮という点で大きな向上が見られた。また、GKのプレーという部分でも技術・能力の差が大きく見られたプレーとなった。「ボール奪う」「相手選手にボールを触らせない」という意識は非常に高く、各国がウォーミングアップの中でも時間をかけて色々なシチュエーションで行っていた。単純に放り込んでくるクロスボールに対しては安定したプレーを発揮していた。ニアに入ってくるボールに対してボールに寄りながらプレーすることや、ファーに入ってくるボールに対して、足を運び、守備範囲を広く守っていた。またその中で、ボールを弾く技術、特にパンチングのプレーの発揮が見られた。ボールに寄りながら両手で弾くプレーや後方のボールを片手で角度を変えて弾くプレーと共に、弾きだす飛距離や方向なども良いプレーとして見られた。

### 【シュートストップ】

今大会、シュートに対しての対応という部分では、良い準備をし続けることの重要性を改めて感じる大会となった。プレーする前に、いかに状況を観て把握しておくこと、予測、判断、ポジショニングをとること、DFとの連携を含めて、指示、コーチングの重要性といった良い準備をすることが、素晴らしいゴールキーピングにつながることを示していた。そして、良い準備をし続けることで予測や細かなポジショニングの修正によって、シュートストップの守備範囲が広がることやプレーの判断「掴む（キャッチ）or 弾く（ディフレクテ

ィング、パンチング)」といったプレーの判断にもつながっていた。それにより、安全確実にゴールを守るシーンが見られた。

#### 【ディストリビューション】

ボールを奪ってから攻撃のスタートとして、以前の大会から大きく進化した部分であると感じた。以前であれば、ロングキックを多用して前線の選手への配球が多く見られたが、チーム戦術の変化も含めて、GKから攻撃を組み立てていき、DFラインの選手に配球して攻撃がスタートしていく形が多く見られた。その中で、配球における、スローイングのスピード、飛距離、正確性など質が求められるものとなっていた。また、各チームが守備組織を構築していく中で、いかに攻守の切り替えを早くして、素早く攻撃の優先順位を考えて、守備組織が整う前（システムが崩れている間）に、ロングスローやボレーキックを用いて、相手ゴール近くにいる味方選手に配球する判断や、技術の面でパスの飛距離や正確性が求められるものとなっていた。今までなら、ロングキックを多用していた中で、現代サッカーの変化と共に、ゴールキーパーの攻撃参加における、テクニックの発揮や状況を把握した中でのプレーの判断、プレーの正確性が今後も求められると共に、多様化していく変化の見られる大会となった。

#### 【パス&サポート】

パス&サポートにおいても、GKがDFへ配球したあとも関わりを続けながら、サポートポジションに入り、パスを受けて、攻撃を展開する、攻撃の組み立ての起点となるプレーが以前の大会より多く見られた。その中で、キック、パスのスピード、飛距離、正確性、などがテクニックの発揮という部分で差が見られた。また、状況を把握した中でのプレーの判断という部分でも、有効な攻撃につながるパスの判断という部分でも差が見られた。

#### 【育成への示唆】

コレクティブなサッカーを展開し、世界の女子サッカーの進化が見られた中で、GKの役割の多様化が求められた大会となった。現在、育成年代で伝えられている「基本技術の徹底」「攻守に関わる」という部分を改めて確認する機会となった。世界で闘う上で、「基本技術」を徹底して習得すること、ゲームの状況下で発揮できるテクニックの重要性を感じた。その中で、あらゆる技術を身につけることも大切であると感じた。フットボラーとしてのコントロールやキックの種類、精度、飛距離。GKとしての掴む、弾く、投げるといった基本技術の徹底と習得を今後も求めていく必要がある。また、「攻守に関わる」という部分では、GKが攻撃に関わり、有効な攻撃の起点となること。守備組織を構築していくためにFPと連携をとりながら、ゴールを守ること。GKにおいても攻守一体ということが今後も求められるものと考えられる。

今後も育成年代において、「基本技術の徹底」「攻守に関わる」という部分を継続して伝えていく必要がある。また、その中でも世界のGKが「良い準備」をして、グッドプレーにつながったシーンが多く見られた。プレーする前段階において「観る、予測、判断、ポジショニング、指示」＝「良い準備」が重要となる。ゲーム状況下でのプレーの発揮や攻守に関わるといった部分を含めて、「良い準備」をすることが必要不可欠である。

## 11. データから見た FIFA 女子ワールドカップ 2015

① 前回大会との比較（前回大会は 16 チーム参加で全 32 試合、今大会は 24 チーム参加で全 52 試合が対象）

	2015 カナダ大会	2011 ドイツ大会
総得点数	146	86
1 試合あたりの平均得点数	2.81	2.69
90 分で勝敗が決した試合数	40	25
引き分けの試合数	10	3
延長戦で勝敗を決した試合数	1	1
PK 戦で勝敗を決した試合数	1	3
与えられた PK の数	22	4
得点になった PK の数	18	4
1-0 で終了した試合数	15	8
0-0 で終了した試合数	2	1
最多得点数を記録した試合	10-1 SUI vs ECU	2-4 FRA vs GER
交代選手が挙げた得点数	20	12
数的不利なチームが勝利した試合数	0	3
逆転により勝利した試合数	4	3

② 得点の種類（どのようなプレーから得点になったか）

全 52 試合 146 得点中

\* オープンプレーからの 98 得点の内訳

コンビネーションプレー	19
サイドからの攻撃	30 (左→14 右→16)
スルーパス	12
ペナルティエリアへのダイアゴナルパス	3
ロングシュート	9
個人での突破から	4
その他	2
ディフェンスのミスから	8
リバウンド（はね返り）	5
オウンゴール	6

\*セットプレーからの48得点の内訳

コーナーキックから	18 (左→9 右→9)
フリーキックから直接得点	3
フリーキックからのプレーで得点	7
PK	18
スローインからのプレーで得点	2

シュート 99

ヘディング 23

ペナルティキック 18

オウンゴール 6

合計 146

③ ポジション別得点数

全 52 試合 146 得点中

フォワード 71

ミッドフィールダー 57

ディフェンダー 12

オウンゴール 6

④ 得点のエリア

全 52 試合 146 得点

ゴールエリア内から	50
ペナルティエリア内から	58
ペナルティエリア外から	20
PK	18

⑤ 得点の時間

全 52 試合 146 得点

1～15 分	27 (18%)
16～30 分	21 (14%)
31～45 分	21 (14%)
46～60 分	20 (13%)
61～75 分	23 (15%)
76～90 分	33 (22%)
91～105 分	0 (0%)
106～120 分	1 (1%)

アディショナルタイムでの得点

前半のアディショナルタイム	2
後半のアディショナルタイム	8
延長前半のアディショナルタイム	0
延長後半のアディショナルタイム	0

⑥ インプレータイム

全試合の平均インプレータイム 51分51秒

(2011年ドイツ大会では57分57秒)

日本の試合 対スイス 56分41秒

対カメルーン 60分14秒

対エクアドル 50分24秒

対オランダ 64分02秒

対オーストラリア 58分57秒

対イングランド 45分11秒

対アメリカ 55分12秒

⑦ 警告（イエローカード）、退場（レッドカード）

イエローカード 110枚

2度目のイエローカード（レッドカード）による退場 1枚

レッドカードによる退場 2枚

⑧ 参加国別平均年齢（英字表記のアルファベット順）

国名	○歳○ヶ月	2011年大会の平均年齢
オーストラリア	24歳5ヶ月	22歳5ヶ月
ブラジル	26歳6ヶ月	26歳4ヶ月
カメルーン	24歳7ヶ月	
カナダ	28歳3ヶ月	26歳
中国	24歳	
コロンビア	23歳6ヶ月	22歳7ヶ月
コスタリカ	23歳11ヶ月	
コートジボワール	24歳1ヶ月	
エクアドル	23歳11ヶ月	
イングランド	27歳10ヶ月	26歳7ヶ月
フランス	26歳7ヶ月	26歳5ヶ月

ドイツ	25 歳 8 ヶ月	26 歳 6 ヶ月
日本	28 歳 4 ヶ月	25 歳 9 ヶ月
韓国	25 歳 9 ヶ月	
メキシコ	23 歳 9 ヶ月	23 歳 7 ヶ月
オランダ	25 歳 1 ヶ月	
ニュージーランド	25 歳 1 ヶ月	23 歳 8 ヶ月
ナイジェリア	23 歳 11 ヶ月	22 歳 9 ヶ月
ノルウェー	26 歳 5 ヶ月	24 歳 11 ヶ月
スペイン	25 歳 11 ヶ月	
スウェーデン	27 歳 11 ヶ月	27 歳 5 ヶ月
スイス	25 歳 2 ヶ月	
タイ	25 歳 6 ヶ月	
アメリカ	29 歳 5 ヶ月	27 歳 9 ヶ月

⑨ 参加 24 チーム中の女性監督

今大会では 8 名の女性監督が指揮を執った。

うち 3 名はこれまでのワールドカップにおいて監督経験がある。(アメリカ、ドイツ、スウェーデン) 5 名はワールドカップでの監督は今大会が初めての経験。(タイ、コスタリカ、コートジボワール、スイス、エクアドル)

⑩ 観客動員数

全 52 試合

総観客数 1,353,506 人

1 試合平均観客数 26,029 人

※2011 年ドイツ大会の 1 試合平均は 26,428 人



## 12. まとめ

2011年FIFA女子ワールドカップドイツ大会において日本女子代表「なでしこジャパン」はアメリカとの激闘の末、PK戦を制して世界チャンピオンになった。あれから4年。図らずも決勝戦は同じ対戦となり、アメリカと闘った。アメリカはその時の悔しさを力に変えて4年間準備してきたことの全てを出しつくすかのような前半の立ち上がりからの闘いに日本は敗れた。

4年前に日本が見せたテクニックをベースにした攻守にわたる組織的なサッカーは、世界の女子サッカーの流れに大きな影響を与えた。今大会は世界の女子サッカーが「テクニカルに、スピーディーに、コレクティブに、そしてタフに」進化をし、サッカーの質が大きく向上した大会であったと言える。

2014年ワールドカップブラジル大会のJFAテクニカルスタディーグループは「よりテクニカルに、スピーディーに、タフに、そしてコレクティブに」この方向に世界のサッカーがさらに進化したことを伝えた。そして「インテンシティー&クオリティー」という言葉で、サッカーのプレーの強度と質の追求の必要性を打ち出した。

今大会のTSGを通して男女の差として、スピードとパワーに差はあるものの、志向するサッカーは男女、同じ方向のサッカーであり、まさに「サッカーの発展傾向に男女差はない」のである。そして、この傾向はますます強くなっていくと考えられる。

日本では今年から4種（小学生年代）のリーグ戦を男女一緒に行い、この年代は一緒にプレーすることになりトレセンの交流も盛んになっている。各年代で身近にいるライバルとして、男女の隔たりを取り払い、交流を深めることは日本の女子サッカーにとっては重要なことである。

今回のTSGの活動を通して、カナダ国内6ヶ所の会場に足を運び、ゲーム分析を行った。この活動中に気がついたことの一つに、「なでしこジャパン」のユニフォームを着て、応援をしている外国人サポーターが多くいてくれたことであり、世界中に「なでしこジャパン」のサポーターがいてくれるということである。

明るく、ひたむきで、芯が強く、礼儀正しい「なでしこジャパン」が、多くの人に愛される「世界のなでしこ」で在り続けるために、今大会のTSGの活動のまとめであるテクニカルレポートをご一読いただき、日々の指導に役立てていただければ幸いである。

JFA TSG 一同

## 寄稿 様々な立場から見た FIFA 女子ワールドカップ 2015

1) なでしこジャパンフィジカルコーチ 広瀬 統一

### 【はじめに】

FIFA Women's World Cup では準優勝という結果を得られた。なでしこ VISION において本大会で優勝することを掲げていた以上、目標を達成できなかったことは反省をしなければならない。その一方で、オリンピックを含めて主要 3 大会で連続して決勝戦に勝ち残ったことは、サッカー女子日本代表の能力が高まっていることを示していると考えられる。さらに女子サッカー選手に好発する非接触性の下肢傷害が発生することなく、多くの選手が決勝戦まで闘える状態にあったことも特筆すべきであると考えられる。そこで本項では、これらの結果に貢献したと考えられる、フィジカルの観点からの取り組みと今後の課題について報告する。

### 【攻守にアクションするサッカーに必要な運動能力】

なでしこジャパンのチームテーマとして「攻守にアクションするサッカー」が掲げられている。このテーマを 90 分間、そして大会期間中を通じて遂行するためには間欠的運動能力（スピード持久力）を高いレベルで身につけることが必須である。また、素早い攻守の切り替えを行うには、優れた方向転換能力に裏付けされたアジリティが必須である。そのためフィジカルの観点からは、スピード持久力と方向転換能力向上を強化のポイントとして掲げてきた。

### 【スピード持久力の現在値】

スピード持久力は Yo-Yo Intermittent Recovery Test Level1 (Yo-Yo IR1) で測定できる。2009 年より継続して測定を行っており、2015 年 3 月初旬現在のチーム平均値は  $1898 \pm 432\text{m}$  である。図 1 に示すように 2009 年以降、経年的にチームとしての能力は向上している。残念ながらアメリカ、ドイツ、フランスなどの強豪国のデータを入手することができなかったため、この数値の優劣について言及することはできない。しかし、2011 年ドイツワールドカップ後に FIFA から報告されたフィジカルレポートにあるように

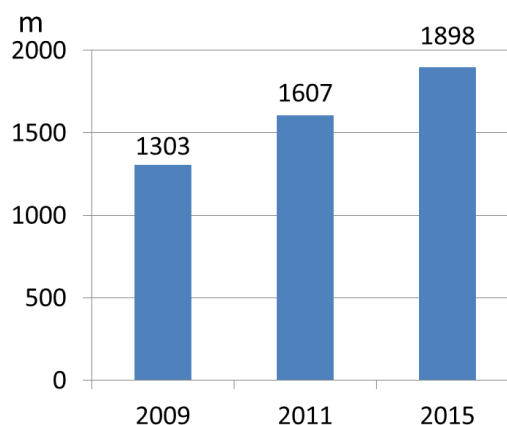


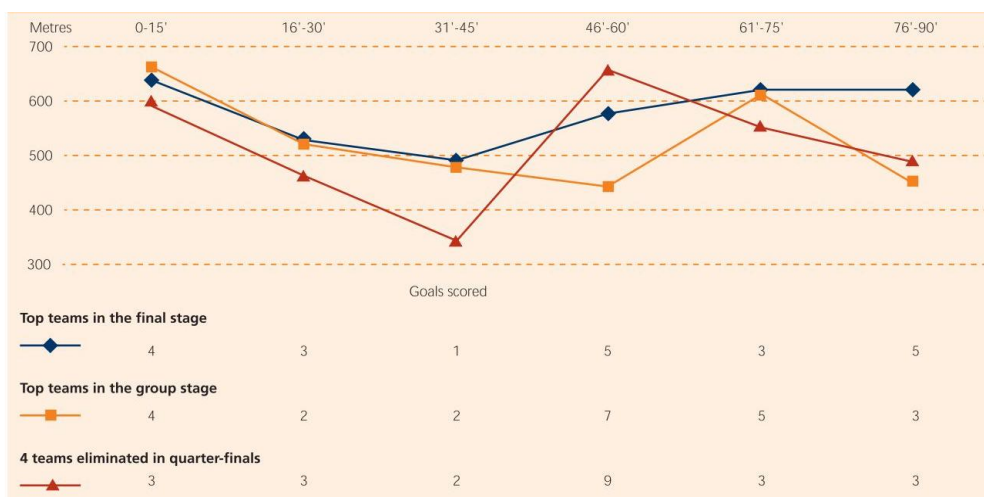
図 1 : Yo-Yo IR1 のチーム平均値の経年変化

- ① 決勝に勝ち進んだ日本と米国は後半の残り 15 分（75 分以降）で得点が多く、それは高強度運動量が維持できていることに関連していること（図 2）
- ② 本大会の日本チームも、試合強度が増す決勝トーナメントの 4 試合にて、残り 15 分での得点が多かったこと（3/6 点）

から考えると、現時点でのスピード持久力は現在の女子サッカーの国際競技力レベルのなかでも、少なくとも決勝トーナメントで闘うために必要なレベルには達していると考えられる。今後、益々世界の女子サッカー選

手の運動能力向上が予想されるため、「攻守にアクションするサッカー」を世界一にするためには、現在値を上まわるようにトレーニングを積み重ねることが必須であろう。

図 2: 2011 年 FIFA 女子ワールドカップにおける日米 (青◇)、予選リーグのトップチーム (黄□)、準々決勝の敗者 (赤△) の試合時間帯ごとのスプリント距離 (>21km/h) と得点経過



尚、現在の各年代の Yo-YoIR1 の平均値は表 1 の通りである。育成年代を通じたスピード持久力の向上が必須である。現在、FIFA や日本サッカー協会はボールを使いながらの持久カトレーニングを推奨している。このような取り組みを通じて、確実に能力を積み上げていくことが重要である。

表 1: 各年代代表選手のスピード持久力 (Yo-YoIR1) と方向転換能力 (10m×5 走) の比較

	Yo-Yo IR1 (m)	10m×5 走 (秒)
なでしこ	1648 (2200)	11.60 (10.97)
U19	1386 (2100)	11.80 (11.12)
U16	1287 (2000)	12.14 (11.52)

\*測定年月は全て 2013 年 2 月 (プレシーズン中)

### Prehabilitation を通じた方向転換能力向上の取り組み

方向転換能力は日本人女子サッカー選手が世界で闘うために必須の運動能力であり、今大会でも重要性が再確認された。決勝戦ではアメリカ選手の優れた直線的なスプリント能力によって失点してしまう局面も散見されたが、その他の試合では多くの場面で日本人選手の方向転換能力が優れていたことがみてとれた。

方向転換動作は減速-停止-方向転換-再加速の各期に分類され、停止から方向転換に要する時間は、選手によって異なるものの概ね 0.3~0.4 秒である。このうちの 0.1 秒を短縮することで、相手との距離をおよそ 50cm 縮める、あるいは引き離すことができると考えられる\*1。これからの国際大会では、この 50cm の距離が対人局面の成否を決定すると考えている。

この減速-停止-方向転換局面の時間短縮を意図して、①減速時の急激な衝撃緩衝能力 (片脚での瞬間的な股関節-膝関節屈曲動作)、②片脚でのバランス、③体幹の安定性、④接地時間の短縮 (プライオメトリクス)、

⑤フットワークの向上を目的としたエクササイズを、練習前のPrehabilitation(アクティブウォームアップ)で継続して行った(図3、4)。さらに、多くの選手が2015年3月のアルガルベカップ以降も意識的に方向転換能力向上のために各種フットワークトレーニングを継続していたことが、本大会において攻守にアクションするサッカーを体現できたことに貢献しているものと考えている。

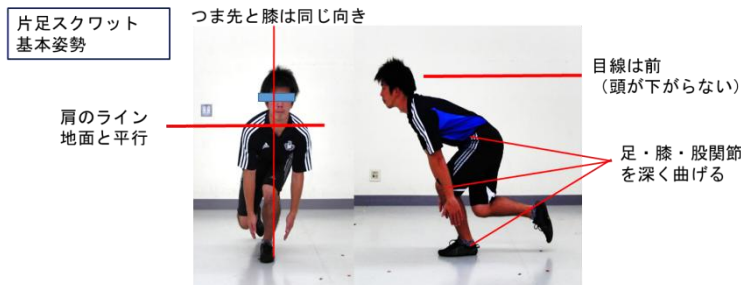
また、これらのエクササイズを練習前に実施することは、女子サッカー選手に好発する非接触性の前十字靭帯損傷予防や足関節内がえし捻挫予防にも貢献する。今大会においてもこれらの非接触性傷害が発生しなかったのは、選手が継続して練習や試合前からだづくりを行ってきたことと、メディカルスタッフのトリートメントの成果であると考えている。

今後国際大会で継続して成果を収めるには、育成年代からのフィジカルトレーニングの積み重ねが必須である。表1に示すように年代ごとで比較した際に、10m×5走で示される方向転換能力に年代差が大きいことがわかる。この能力は中学生から高校生年代に顕著に発達するため、この時期の指導者には適切なフィジカルトレーニングを通じた選手の方向転換能力改善を促したい。

注1：成人女子サッカー選手の10mスプリントが1.9秒-2.0秒であるため、1000cm/20で単純計算をして割り出した値。実際にはこの数値と異なることをご理解いただきたい。

### ・スクワット&ランジ

- \* 体幹筋-下肢筋の協調性を高めてバランス保持
- \* 膝とつま先の方向一緒、肩のラインを地面と平行にしてケガ予防
- \* 前後、左右、捻りの動きすべてでバランス保持する



### フロントランジ

- ・ 重心高い/低い両方でのバランス
- ・ 膝とつま先を同じ方向でケガ予防
- ・ バックランジ/ツイストランジも行う
- ・ 6~10歩を目安



### サイドホップバランス

- ・ ジャンプの着地でのバランス
- ・ 着地時に瞬間的に足・膝・股関節を深く曲げる(写真より深く)
- ・ 肩のラインは地面と平行
- ・ 6~10歩を目安
- ・ バックホップバランスも実施

図3：衝撃緩衝、バランス、体幹安定性のエクササイズ例

運動方向： 前後・左右・捻り  
 方向転換： カutting・ターン  
 運動形態： 単純・複合 を組み合わせる

### 基本フットワーク

- ・ 股関節を使う
- ・ 動きのなかで体幹部を安定させる
- ・ 体幹と下肢を分離して使用
- ・ 体幹と下肢を協調して使用  
\* これらを意識して実施



### 専門フットワーク

- ・ フットワークの使い分け
- ・ 接地時間を短くする
- ・ 動作を素早くする
- ・ 動作を安定させる
- ・ 反応時間を短くする  
\* これらを意識して実施

## 基本フットワーク



- インアウト 4歩**
- ・ スクワットポジションをしっかりとる
  - ・ 姿勢を変えないように股関節を動かす
  - ・ 2歩で前→2歩で後ろに移動
  - ・ 前後の動きの際に上半身があおらないように注意する



- インアウト 3歩**
- ・ スクワットポジションをしっかりとる
  - ・ 姿勢を変えないように股関節を動かす
  - ・ 1歩で前→2歩で後ろ（捻りの動き）
  - ・ 捻りの動きの際に上半身があおらない、顔は前を常に向いているように注意
- \* マーカーでもOK

## 専門フットワーク

### ラインクロスオーバー・ラン



- ・ 1歩ずつのクロスオーバーで後ろに下がる
  - ・ 頭の位置がぶれず、視線はつねに前を見るようにする
- 発展
- ー 3~4歩のクロスオーバー後にアプローチ
  - ー 3~4歩のクロスオーバー後にターン
- \* アプローチ時、ターン時のバランス保持（重心を歩幅の真ん中あたりに）

### スクエア・フットワーク



- ・ 2~5歩間隔で四角形にマーカー接地
- ・ 1の方向にアプローチし、2の方向にクロスオーバー（5歩設定）orサイドステップ（2歩設定）し、内向きのターンもしくは外向きのターンで4の方向にダッシュする

\* ターン後に進行方向をみること、またターン方向の足（右ターンなら右足）をターン後の進行方向よりも少し外に開く感じで、直線的に進行方向にターンできるようにする。サイドの動きは細かい動きと幅広く動くものを使い分けるようにする。

図4：フットワークエクササイズの見え方と例

## 2) 国際女子主審 山岸 佐知子、国際女子副審 手代木 直美

### 準備・選考過程

今大会は 2013 年から各種大会・セミナーを経て最終的に主審 22 名（リザーブ 7 名）、副審 44 名が選考されました。

このセミナーに参加するまでには事前に JFA で fitness test や agility test の対策にご協力いただき、また、大会前には二人で実戦できる機会を頂きました。セミナー参加前も本大会前も数多くの方からのご協力を得て、体調や技術面の準備する時間を頂き、大会に参加させて頂きました。

### 担当試合

#### USA vs SWE

グループリーグの中でも最も厳しいリーグになるのではといわれていたグループ。この試合は大会第 2 節目となる試合で、第 1 節目にアメリカは 1 勝、スウェーデンは 1 敗していました。スタジアムはほとんどがアメリカのサポーターで、完全にアメリカのホームという独特の雰囲気でした。球際は激しかったものの、選手は最後までフェアにプレーをしていました。スウェーデンがコーナーキックで攻撃する際、1 列に並んでから散らばるフォーメーションは印象的でした。【山岸】

他国の審判員が日本チームに対して感じるものと同じように、私も世界的に名の知れた選手、チームのプレーを実際に目の当たりにできた感動がありました。事前に 1 戦目の分析を行っていたため大きな戸惑いはなく、試合に関わることができました。後半になってアメリカチームが FW の選手交代を行ってからは Offside の判定を何度も求められることになり、また、FW の層が厚く個人技だけではない「連携」も感じました。

アメリカのホームゲームのようなサポーターの数で、声援もブーイングも国内では感じたことがないほど大きく、初めて感じた雰囲気を最後まで楽しむことができました。【手代木】

#### MEX vs FRA

グループリーグ第 3 節目。両チームとも決勝トーナメントの可能性を残した対戦。1 点目を開始早々にフランスが奪い、終始フランスが主導権を握り試合が進みました。メキシコがファールでフランスのプレーを止めようと試みても、フランスが常に余裕を持ってコントロールをしていたのが印象的でした。【山岸】

フランスチームは終始冷静でした。負けられない対戦であったにもかかわらず、焦ることなく対応していました。特に DF はカバーリングが徹底され、FW はどこからでもシュートを打ってくる体制が印象的でした。

この試合では初めて中国の方と組みました。それにも拘らず、山岸さんは動じることなく自分の要求をしっかりと伝え、また、副審の方（Fang Yan）もすぐに順応していました。お互いに初めて一緒に組むことがあってもやるべき仕事は同じなので、忠実に副審の仕事を熟す副審の能力の高さを改めて感じました。【手代木】

### 日本との違い、特徴

コンタクトプレーは国内リーグ選手と比較すると少し違うように感じました。海外の選手の方が、よりコンタクトをしながらプレーすることに慣れていているように感じるがありました。【山岸】

Offside line のコントロールは日本チームは優れていると感じました。副審は事前のセミナーでも大会期間中も毎日 offside test を実施し、映像を用いてフィードバックも行っていました。それだけ準備をして大

会に挑んでいます。他国の審判員からは、日本チームのDF line が難しいと話されていることが多く、常に offside test をしているようだと話されていました。また、FW は「蛇」のように動くから騙される、惑わされるとも話されていました。【手代木】

トップを目指すために（育成世代）

日本のフェプレー精神はマスコミのみならず審判員の間でも評判でした。これは今まで日本の長年取り組みの成果であると感じました。日本が世界に誇れる素晴らしい伝統を継続出来るよう、育成世代からフェアに激しくプレーし、笛が鳴るまでプレーをやめない習慣を身に付けることは改めて大切であると思いました。

【山岸】

今後（今）求められている審判法

最近のサッカーのスタイルはカウンターアタックが多くなっているという背景から、主審はペナルティエリア内での事象を正しく判断するためのポジショニングや動きを指導されていました。そのため、そのサッカースタイルに合った動きができる身体能力を求められていました。また、副審は Offside を正しく判断するためにはとにかく正しいポジション（オフサイドラインに対して 90° の位置をとること）をキープすることが求められました。そのために必要なスプリントや reaction の能力、選手の動きに合わせて瞬時に対応できる身体能力を主審と同様に求められました。選考のセミナー時にスプリントや agility のテストも導入されており、サッカーのスタイル、選手のスキルの変化に応じて審判員の求められる身体能力も変わってくることを大会を通して感じました。【手代木】

その他

当初、大会前に行われた審判セミナーでは、人工芝の影響でボールが早く転がると予測されていましたが、実際にはボールの転がりは遅く感じました。

今回女子の大会で初めてゴールラインテクノロジーが採用されました。ボールがゴールに入ると腕に装着した腕時計式の機械がバイブレーションによりがゴールを知らせる仕組みになっていました（腕時計式の機械に「GOAL」と表示される）。この腕時計式の機械は主審、副審、第4の審判員の4名が着用していました。【山岸】



### 3)U-19 日本女子代表監督、FIFA TSG 高倉 麻子

1991年、中国でスタートを切った女子W杯は今回で第7回目を迎えた。出場国は前回大会の16から24チームへと増え、観客動員数は135万人を超え、TV視聴率も過去最高を記録し、世界中で女子サッカーが大きな広がりを見せ、急速に発展していることがうかがえた。

また、前回のドイツ大会で新鋭日本が優勝を果たしたことにより、世界の女子サッカーは、長年その主役に君臨してきたアメリカ、ドイツが見せるパワーサッカーから、選手個々の技術が重要視されるようになり、パスサッカーによるポゼッション志向するチームが増えた。また、守備ではその組織化が進み、“個”の強さより、“チーム力”が勝敗を分ける、といった試合が多かった。

決勝の地、バンクーバーには約5万4千人が足を運び、対戦カードは2011ドイツ大会と同カード、日本vs U.S.Aとなった。この対戦は、日本の2連覇か、U.S.Aの雪辱なるか、といった点でも大きな話題となったが、地の利からアメリカ応援が圧倒的に多く、日本は完全アウェイの雰囲気の中でFinalを戦うことになった。結果は5-2という大差でU.S.Aが勝利を飾り、日本の2連覇の夢は叶わなかった。

#### 【傾向】

先にも述べたように、世界の女子サッカーは日本が頂点に立った4年前からその方向性に変化が見られ、選手の「個々の技術」、「状況判断」、「組織的な守備」、といったことが重要視されるようになった。その中で、トップレベルにあったのは優勝したU.S.A、日本、ドイツ、そしてフランスであったが、選手個々の技術レベルといった点でいえば、フランスが群を抜いていた。各ポジションにその役割に合ったスペシャルな選手がいて、巧く、強いチームであった。しかし、“チーム力”という点ではその個性の強さが仇となるのか、ゲームの中で1度崩れると中々チームとしてまとまりを保つことが出来ないといった脆さがうかがえた。そういったことも含め、前評判に反して総合的にU.S.Aと日本はFinalistになるに値するチームだったといえた。

#### 【フィジカル】

一方で、女子サッカー自体のフィジカル的な要素のレベルアップが見られたことも記述しておかなければならない。試合中でのボディコンタクトの強さ、スピード、というシンプルなアスリートとしての能力はU.S.A、フランス、イングランドやドイツは相変わらず高く、また、カメルーン、コロンビア、中国などもそのポテンシャルは高かった。ただ1つ1つのプレーの質、という点ではまだまだ未熟さがあり、各国ともこれが改善されていくと女子サッカーの質自体が飛躍的に向上すると思われた。

#### 【新鋭の台頭】

また、出場国が増えたことにより大会自体の質が落ちるのではないか、という声があったが、杞憂に終わった。ドイツvsコートジボアールこそ10-0の大差になったがその後コートジボアールは試合ごとに成長を見せていたし、アジア5位のタイも善戦した。初出場8チーム中、カメルーン、オランダ、スイスの3チームは決勝トーナメントに進出し、その可能性を見せ、個で際立つ選手も見られた。また、コスタリカは僅差で決勝トーナメント進出を逃しはしたが、若い女性監督のもと、粘り強くアグレッシブな素晴らしいサッカーを見せた。そして何と云っても、大きいのは、この大会の経験を踏まえ、また各チームが4年間、チーム強化を図り、各大陸でまた競争し、レベルアップして行くことが出来るという事だ。今後は、各国の協会がいかに女子の強化



に取り組むか、によってその勢力図は変わっていくであろう。

#### 【日本の未来】

今大会、日本は、これまで通りフィジカル的な弱点を、「技術」「判断力」「組織力」、そして「経験」で補ってきたが、今後、各国ともプレーの質が向上していくであろうことを考えると、更に大きな進化が必要であると感じる。

未来へ向かうために、1つ1つのプレーにもっとこだわりを持ち、そのプレーに意味をもたせていく。そして、チームとしての戦術を全員が理解し、同じ方向へ向かいながらその判断とプレーの質、そしてそのスピードを上げていくことが必要になる。また、決勝での大敗を教訓とし、試合の入り方、セットプレー、守備の組織、攻撃のバリエーションを増やしていかなければならない。攻守ともにペナルティボックス内で何が出来るか、を追求していきたい。

#### 【世界から見た日本】

大会前、日本の前評判は決して高いものではなかった。それはここ最近の国際大会の結果や出来、4年前とメンバーがほとんど変わっていない、という要素からの評価であった。実際、大会が始まってからも、堅実で派手さのない1点差のゲームが続き、各国のスタッフは日本の評価を多くは口にしなかった。ただ、色々なチームを分析していく中で、感じたのは、“日本のようなチームは他にない”という事実だ。スピード、パワーに劣り、得点力も決して高くない。しかし、ゲームが終了すると日本が勝っているのだ。その老獪ともいえる戦いと、献身性、技術の確かさは世界の中で「唯一無二の存在」である。そして、多くの人間が、日本のファンである、という事も強く感じる。

日本は自分たちが思っている以上に、世界の女子サッカーの未来を担っているのではないか。私が1ヶ月FIFAのTSGメンバーとして仕事をして感じたのは、未来への大きな危機感と、大きな希望という全く矛盾した、そして混沌とした感覚であった。

この“矛盾”と“混沌”をしっかりと整理し、日本は今から前に進まなければならない。

その答えを見つけるのは、選手であり、指導者であり、すべての関係者である。今こそ、この大敗の現実と悔しさを真摯に受け止め、揺るがず全員の力で日本女子サッカーをもっと上に押し上げていかなければならない。

#### 4) JFA 理事、なでしこジャパン団長 上田 栄治

##### 【概要】

2015年女子ワールドカップはカナダで開催され、なでしこジャパンは2011年に続いて決勝に進出し準優勝した。今回のワールドカップは出場国が24か国に増え、大差の試合が多くなることを予想したが、それは数試合だけで拮抗した試合が多かった。グループリーグではコロンビアがフランスを破ったり、コスタリカが劇的に韓国に追いついたり、かなり世界的にレベルアップした印象がある。日本はすべて1点差勝利の連続で決勝まで勝ち上がったこともあり、全体的に力が拮抗してきたと言えるだろう。

なでしこジャパンは初戦のスイスを1-0で勝ち、グループリーグを狙い通り1位で突破した。1位になることにより決勝トーナメントの組み合わせが、決勝までドイツ、アメリカ、フランスと当たらなくなった。このスイス戦で澤選手が国際Aマッチ200試合出場、宮間選手が150試合出場の大記録を同時に達成した。澤選手は1993年代表初招集から22年、宮間選手は2003年初招集から12年目の快挙である。

今大会はすべて人工芝で行われ、準々決勝オーストラリア戦は日差しが強く人工芝の表面はかなり高熱で、ハーフタイムには氷で足を冷やす選手が半数いた。この試合時は暑さ指数(WBGT)の値が低くウォーターブレイクが無かったが、人工芝と天然芝が同じ基準には疑問がある。

試合については1点差を争うゲームが多く、リスタートが得点源として重要性を増し、相手の動きをブロックして味方をフリーにさせるブロッキングを行うチームが増えた。CKやFKでボールがキックされる瞬間に相手の動きをブロックするため、レフェリーには分かり辛く反則を取られない傾向があった。

日本の戦いは攻守にアクションするコンセプトのもと、自分たちの特長をできるだけ発揮するサッカーを目指した。今まで立ち上がりをはじめ相手のパワープレ的なサッカーへの対応が課題になっていたが、今回具体的なプレーをトレーニングし改善傾向にあった。しかしながら決勝のアメリカ戦では、相手が怒濤の勢いで開始早々のリスタートから2点を失い、健闘したが結果的に優勝することはできなかった。

##### 【総括—今後に向けて】

2011年ワールドカップ、2012年オリンピック、2015年ワールドカップと世界主要3大会連続で決勝に進出したことは、強化の方向性は間違っていないと思われる。常にベスト4に進みながら優勝を狙う力をつけていくこと、そして決勝で勝ちきることが今後の目標だろう。決勝の相手アメリカはワールドカップでは1999年以来優勝から遠ざかっており、優勝に掛ける思いは並々ならぬものがあつたと推測される。単にチームばかりではなく、アメリカの女子サッカー全体が優勝への願望を強く持っていたのではないかとと思われる。

以下、今後に向けて私見を述べたい。

##### 1. 目標設定

ワールドカップ優勝を目標に定めたが、高い目標にチャレンジすることで、世界主要3大会連続で決勝に進めることができたと思われる。今後も目標は世界一におき、決勝で勝つためには何が必要か、議論する必要がある。

##### 2. 日本のコンセプト

攻守にアクションするコンセプトのもと、なでしこジャパンのプレースタイルができてきたが、これを継承

しながら質を上げることが今後も必要だと考える。テクニックと状況判断に優れ、組織的なサッカーで主導権を取るには、ユース年代からの一貫的な育成なくしてはできない。今までの育成の取り組みがあったからこそ土台ができ、大会やなでしこリーグの試合の中で切磋琢磨が生まれ選手たちが成長する。強化については、今後も育成やリーグとの連携が重要になる。

### 3. 世界のトレンド

2011年ワールドカップを分析し、世界のトレンドは『よりテクニカルに、スピーディに、コレクティブに』進歩すると予測したが、まさにその傾向でレベルアップしてきている。我々はその賢く駆け引きする要素を加え、一歩先んじようとしたが、まだ明確な差をつける域にない。アメリカが決勝戦で単純なパワープレーでなく、周到に準備されたリスタートで先行した。我々は日本の特長を活かしながら、よりテクニカルに、スピーディーに、コレクティブに、そしてさらにスペシャルなディテール(特殊なチーム・グループ戦術、リスタートなど)を創ったり、特別な個を育成したりしていかなくてはならない。今後のアジアオリンピック予選、リオオリンピックは、より詳細な部分が勝負を決めるようになるだろう。

### 4. ポゼッションとリポゼッション

ポゼッション(ボール保持)とリポゼッション(ボールを奪い返す)については、どちらかだけでなく両方しながらゴールを目指す意識が必要だと思われる。競り合いでマイボールにする、ボールを奪って攻撃に結び付けるプレーをもっと評価したい。またポジションによってはサイズが必要で、GK、DF、FWなど引き続き大型の選手の発掘育成は重要である。

### 5. フィニッシュ

フィニッシュは常に課題であり、チームとしての狙いや個性を活かす狙いを持ち取り組まなくてはならない。ゴール前はワンタッチプレーとドリブルを効果的に使い、日本の特長を活かす必要である。

### 6. まとめ

2011年は無欲の優勝だったが、今回2015年は決勝に駒を進めるために、初戦スイスは必勝、そして一次リーグを1位で抜け、決勝トーナメントはアメリカ・ドイツ・フランスと当たらずにというプラン通りに行った。

決勝のアメリカは、開始早々の凄まじい迫力や高いテクニックとフィジカル、さらに意表をついたリスタートによりやられた感がある。我々はこのような舞台に立ち勝ちきるために、この敗戦を経験とし、女子サッカーの普及・育成・強化とより一層連携を取りながら、さらにレベルアップを図って行く必要がある。

今回の成績は監督をはじめスタッフ・選手たちの努力の成果であり、特にチームをマネジメントしながらファイナルまで進めた監督の指導力は大きい。また安藤選手の離脱はあったが、ほぼ選手たちのコンディションは良好でコーチングスタッフやメディカルスタッフも貢献してくれた。なでしこジャパンの選手たちはキャプテンを中心にまとめ、チーム一丸の雰囲気強く感じられた。

今後の強化については、JFATSGとFIFATSGの報告を参考にしながら、関係者で今後の対策を検討したい。

FIFA 女子 W 杯カナダ 2015 は、アメリカ優勝、日本準優勝、初メダル獲得なったイングランドが 3 位という結果で幕を閉じました。まずはチーム一丸となって最後まで全力で戦い抜いてくれたなでしこジャパンの全選手に心から敬意を表します。そして選手たちを支えてくださったチームスタッフ、関係者、サポーターをはじめ、支援・応援して下さった全ての方々には心から感謝の気持ちを表したいと思います。

さて FIFA 女子 W 杯カナダ大会ですが、今大会は参加国が 16 から 24 に増え、そして全会場で人工芝が使用されました。もちろんこうした新しい試みには賛否がつきもので、大会期間中に各国の女子関係者と話をしても、本当にさまざまな意見が飛び交っていました。しかしいずれにしてもここまで男子の後追いでやってきた女子サッカーにとっては、この大会が「新たな女子の道」を歩み出すための第 1 歩になったことは間違いのないと思います。新しい試みも含め、さまざまな収穫と課題が見られたカナダ大会は、女子サッカーの未来に向け、とても意味のある大会となったのではないのでしょうか。

#### 【強豪以外の国々の急速なレベルアップ】

参加国枠が 16 から 24 に増えたことは、女子サッカーのさらなる普及発展に間違いなくつながります。ですがその一方で、これにより初出場が 8、FIFA ランキングも 1~67 位と広がり、もしかすると大差のつく試合が出てしまうのではないかという懸念もありました。実は私も大会前はこれをととても心配していました。しかし大会が始まるとそんな心配はすぐに消え、逆に日本 (FIFA ランク 4 位) が予選で対戦した、スイス (19)、カメルーン (53)、エクアドル (48) との戦いぶりを見てもわかるように、予選はどのグループも混戦。特にこれまで強豪と言われてきた常連以外の国々の躍進は、上との差が確実に縮まったことを強烈に印象づけました。この全体のレベルアップは今大会一番の“収穫” だったのではないのでしょうか。

#### 【女子サッカー新時代への予感】

今大会、とても印象に残った試合があります。ベスト 16 で対戦したアメリカ対コロンビア。FIFA ランクはアメリカ 2 位、コロンビア 28 位。シュート数はアメリカ 15、コロンビア 10。ボールポゼッションはアメリカ 53%、コロンビア 47%。2-0 でアメリカが勝利したのですが、結果だけみればコロンビアの善戦が光るも、やはり地力で勝るアメリカが順当に勝ったように見えます。が、実際の内容はというと、コロンビアは男子同様、突出した個のテクニックと南米独特のリズムや試合運びをベースに、ドリブルやワンツーでアメリカを翻弄。0-0 の前半は互角以上の戦いをしていました。後半も開始直後に退場者を出して 10 人になったにもかかわらず、自分たちのスタイルを変えることなく最後の最後までアメリカを困らせ、そして最後の最後まで観客の目を釘付けにしました。勝ったという記録に残ったのはアメリカですが、試合後、スタンドから送られた拍手の大きさが物語るように、観ている人々の記憶にはコロンビアが残ったと思います。惜しくも決勝トーナメントは逃しましたが、スペインも男子譲りのポゼッションスタイルを貫き、美しく散っていきました。

欧米のパワフルなスタイルに日本がパスサッカーを用いて世界一に輝いた 2011 年を機に、今やビルドアップやポゼッションはどの国においても当たり前になりました。そしてさらに今大会では「コンパクトで組織的な守備」をする国が多々見られ、女子の世界でも強固なブロックを形成して意図的にボールを奪うことが当たり前になったのだと感じました。おそらく次の W 杯では、今度はこの守備をどう崩すかという「攻撃の形」を戦略的にやってくる国が多く見られることでしょう。当たりの基準が上がったことで各国の色がより鮮明に

映しだされた今大会は、女子もいよいよ各国のスタイルをベースにした戦術戦時代へと突入することを予感させられました。

#### 【なでしこジャパン】

加速度的にレベルアップが進んでいることを印象づけた今大会は、各国が「ここでついていくか、おいていかれるか」を選ぶターニングポイントになると思います。もちろん日本は前者を選択しますが、大事なのはそのために何をすべきか・・・

佐々木監督が2007年12月に就任して以来、なでしこジャパンは世界大会において「3大会連続で決勝に進んだ功績と2大会連続で優勝を逃した事実」というかけがえのない経験を残してくれました。そして前回大会とメンバーが変わらなかったことで「日本のパスサッカーはやはり世界で通用するし、これからも日本のベースとなる」ことを証明してくれました。

日本のパスサッカーは、「フィジカルの差は埋まらない。が、それを言い訳にしない」を合言葉に日本が初めて世界に挑戦した時から今まで、どうしたらあのフィジカルに対抗できるか試行錯誤を繰り返した賜物です。時代やトレンドが変わり、メンバーが変わろうとも日本のベースは変える必要はありません。むしろ今大会を通じ、自信を持って継続・継承していくべきだと確信しました。

「目標は世界一」。女子の代表選手が代々受け継いでいる目標はベスト4や決勝進出ではなくあくまで「優勝」です。もちろん3大会連続で決勝に進んだことは素晴らしい功績です。負けても健闘を讃えてくださる方々には誠意を持って感謝の気持ちを表します。が、決勝後に行われた表彰式の光景を決して忘れてはいけないし、決勝に敗れた選手たちが流した涙を無駄にしてもいけません。表彰式を見ながら優勝という目標は、日本のパスサッカー同様、変えてはいけないと強く感じました。

#### 【JFA女子委員会から女子サッカーファミリーのみなさまへ】

「仲間をリスペクトする」「感謝の気持ちを忘れない」「諦めない心を持つ」「日々の積み重ね」。これはなでしこジャパンの選手たちが共有している4つの心です。この心を持って選手たちは今回、大会を通じて「日本の女子サッカーに対する純粋で熱い思い」をオンオフ問わず各々発信してくれました。これに対し、私たちJFA女子委員会は「プレーヤーズファースト」の観点から選手たちの思いを真摯に受け止め、よりしっかりとした「ビジョン」「コンセプト」「アクションプラン」を打ち出すことを決めました。

私たち日本の女子サッカーファミリーはまだまだ小さな団体ですが、でもそれは見方を変えればまだまだ大きくなれる要素があり、限りない可能性を持っているということです。でもだからこそ「ファミリー拡大」のために、今このタイミングでしっかりとビジョンや心など、全てを共有することが大事なのだと思います。「勝利」という同じ目標の下、1人1人のハードワークによって攻守において数的優位を作り出す日本のコンセプトと同じです。日本中にいる女子サッカーファミリーがベクトルを合わせ、アクションを起こし、仲間を増やしながらリオ～フランス～さらには東京五輪へと進んでいきたいと考えています。そして2023年FIFA女子W杯日本開催を大家族で実現させ、日本はそこで世界大会自国開催、連続優勝を達成する。そんな絵をこれからみなさんと共有していきたいと思います。



**DREAM**  
夢があるから強くなる